

青山学院大学

ジェンダー研究センター年報

第 4 号

2025 年 3 月

Schoonmaker Memorial Center for Gender Studies at Aoyama Gakuin University

青山学院大学スクーンメーカー記念ジェンダー研究センター

青山学院大学
ジェンダー研究センター年報
第4号（2024）

目 次

ジェンダー研究センター 2024年度活動記録.....	2
ジェンダー研究センターギャラリー 2024年度展示記録.....	4
ジェンダー研究センター 2024年度研究プロジェクト.....	5

ジェンダー研究センター指定型研究プロジェクト 「青山学院大学におけるジェンダー教育カリキュラムの構築」 (2022/4/1 – 2024/3/31)

青山学院大学におけるよりよいジェンダー教育に向けて： 研究プロジェクトから見えた課題と展望.....	菅野 美佐子 8
---	----------

寄稿エッセイ

スクーンメーカーが蒔いた「宣教の種」150年後の実り ーグランディ郡歴史協会博物館ドーラ・E・スクーンメーカー常設展示に至る経緯ー	河見 誠 26
---	---------

ジェンダー研究センター 2024年度活動記録

<2024年>

4月1日 入学式にて性的同意ハンドブック「探検しよう！ 私とあなたの気持ちを守るには」を全新生に配布

4月11日～（月2回・定期開催）
「コミュニティスペース」開始

4月20日・4月21日
東京レインボープライド2024にて渋谷男女平等・ダイバーシティセンター＜アイリス＞・聖心女子大学グローバル共生研究所・津田塾大学・実践女子大学との協働でブース出展

4月20日～5月11日
展示「共創の場：ジェンダー問題とアジアのアート・コレクティブ」関連イベント：
開会式&ガイドツアー／対談企画「フェミニズムを实践する：VaChina×エトセトラブックス」／木版画ワークショップ by イースト・アジア・エコトピア
／上映会「MIMOZA WAYSミモザウェイズーわたしたちの道」／CASS縫いものワークショップ by Itazura NUMAN／上映会「KITA」／
対談企画「リブ新宿センター資料保存会×チェルシー・シーダー（青山学院大学教授）」

5月11日・5月25日・6月8日・6月22日・7月13日
エンパワーメントプログラム ジェンダーと表現〔造形表現・織ワークショップ〕（前期）

6月1日・7月20日
エンパワーメントプログラム ジェンダーと表現〔造形表現・版画ワークショップ〕（前期）

6月11日 白波瀬佐和子氏 特別講義「Gender Gap in Work and Family－職場および家庭におけるジェンダーギャップ」（国際政治経済学部「Intercultural Communication」）（協力）

6月12日 ワークショップ「褒め言葉が実は差別？ マイクロアグレッションについて学ぼう」

6月22日 渋谷男女平等・ダイバーシティセンター＜アイリス＞出張開催 読書会「にじいろ読書カフェ」

6月28日 上映会・講演会「Icy Lake－1996～2015年ニューヨークのゲイ・コミュニティにおける映画制作とエレクトロニック・ダンス・ミュージックをめぐって」

7月6日 インプロワークショップ『ザ・ベクデルテスト』

7月17日 学生企画「もやもやカフェ@青山キャンパス」

9月21日・10月5日・10月19日・12月7日

エンパワーメントプログラム ジェンダーと表現〔造形表現・織ワークショップ〕（後期）

10月5日～12月21日（土曜日全8回開催）

エンパワーメントプログラム「女性のためのマナーリテラシー講座 ～3級FP技能士を目指そう～」

10月12日 エンパワーメントプログラム ジェンダーと表現〔造形表現・版画ワークショップ〕（後期）※青山アカデメイアにて開講

10月26日 講演会「印刷技術から見る書物・絵本のイラストレーション」

11月9日・11月16日

エンパワーメントプログラム ジェンダーと表現〔造形表現・織ワークショップ〕（後期）※青山アカデメイアにて開講

11月9日・11月16日・11月30日・12月7日・12月14日

青山学院大学青山キャンパス公開講座「ジェンダーと表現」開講

11月27日 「性的同意ワークショップーより安全で充実したキャンパスライフのためにー」

11月30日 ワークショップ「パレスチナ刺繍でバッジを作る」

12月19日 学生企画「もやもやカフェ@相模原キャンパス」

<2025年>

1月28日 日本ジェンダー史シンポジウム2025 -2025 JAPANESE GENDER HISTORY GRADUATE STUDENT SYMPOSIUM-（共催）

3月 ジェンダー研究センター年報 第4号 発行（予定）

ジェンダー研究センターギャラリー 2024年度展示記録

4月1日～4月17日	ジェンダー関連科目紹介展
4月20日～5月11日	共創の場：ジェンダー問題とアジアのアート・コレクティブ
5月15日～5月31日	ジェンダー研究センター活動報告展
6月3日～6月15日	キリスト教美術展 at aoyama
6月19日～7月3日	おーる あおやま あーと てん '24 *
7月5日～7月27日	ジェンダーと表現「織・版画ワークショップ」作品展
9月20日～10月2日	ジェンダー関連科目紹介展
10月4日～10月19日	《青山学院行進曲》作曲の背景をめぐって－ヨーゼフ・ラスカ、日本における女子専門教育と音楽活動
10月22日～11月13日	図書館所蔵貴重図書「オーク・コレクション」展－印刷技術から見る絵本のあけぼの－
11月15日～11月29日	青山学院創立記念所蔵作品展
12月3日～12月11日	Art クリスマス Aoyama in Gallery *
12月13日～2025年1月25日	ジェンダーを知るためのブックレビュー展

(*は、ジェンダー研究センターの企画以外による)

ジェンダー研究センター 2024年度研究プロジェクト

■指定型研究プロジェクト

「青山学院における女子教育の検証 ―オーラルヒストリー・プロジェクトII―」

リーダー：小林 瑞乃

期 間：2023/4/1－2025/3/31

研究目的：青山学院女子短期大学の来歴とそこに学んだ学生達の学びの総体について個人
人の経験や思い出の中に探求し、学院における女子教育の歴史的意義を未来に
に向けた資産として継承・発展していくことを目指す。

プロジェクトメンバー：

小林 瑞乃	コミュニティ人間科学部 准教授
河見 誠	コミュニティ人間科学部 教授
後藤 千織	コミュニティ人間科学部 准教授
菅野 幸恵	コミュニティ人間科学部 教授
趙 慶姫	コミュニティ人間科学部 教授
西山 利佳	コミュニティ人間科学部 准教授
山田 美穂子	コミュニティ人間科学部 教授
吉岡 康子	コミュニティ人間科学部 准教授
輪島 達郎	コミュニティ人間科学部 准教授

■公募型研究プロジェクト

「フェミニスト神学を通して考える思想と実践の総合的研究」

リーダー：福嶋 裕子

期 間：2023/4/1－2025/3/31

研究目的：贖罪信仰によってではなく、互いの関係性において神の愛を受け取るという経
験によって引き起こされたさまざまな社会変革の軌跡を分析し、いのちと人間
性を肯定するフェミニスト神学への理解を深めることを目指す。

プロジェクトメンバー：

福嶋 裕子	理工学部 教授
大森 秀子	教育人間科学部 教授
後藤 千織	コミュニティ人間科学部 准教授
堀 真理子	経済学部 教授

■公募型研究プロジェクト

「戦後沖縄に生きる女性たちのまなざし ―ジェンダー、エスニシティ、アイデンティティ」

リーダー：安斎 聡子

期 間：2024/4/1－2026/3/31

研究目的：戦後沖縄における女性研究には、膨大な語りの収集と厚い研究の蓄積がある。

本研究では、この歩みに復帰50年余、戦後80年を迎える現在の女性たちの語りを重ねること、語りに現れる女性たちと沖縄、日本社会との呼応を、ジェンダー、エスニシティ、アイデンティティの観点から捉えることを目指す。

プロジェクトメンバー：

安斎 聡子	コミュニティ人間科学部 教授
輪島 達郎	コミュニティ人間科学部 准教授
宮城 晴美	元琉球大学グローバル教育支援機構 非常勤講師

ジェンダー研究センター指定型研究プロジェクト

「青山学院大学におけるジェンダー教育カリキュラムの構築」

(2022/4/1 - 2024/3/31)

プロジェクトメンバー

菅野美佐子	地球社会共生学部 助教
梅垣 千尋	コミュニティ人間科学部 教授
クープ・ステファニー	法学部 准教授
福嶋 裕子	理工学部 教授
森本麻衣子	法学部 准教授
西山千恵子	兼任講師

青山学院大学におけるよりよいジェンダー教育に向けて： 研究プロジェクトから見えた課題と展望

菅野 美佐子

プロジェクトメンバー

菅野 美佐子 地球社会共生学部・助教
梅垣 千尋 コミュニティ人間科学部・教授
福嶋 裕子 理工学部・教授
森本 麻衣子 法学部・准教授
COOP, S.L. 法学部・准教授
西山 千恵子 兼任講師

サポートメンバー

安村 直己 文学部・教授
大道寺 隆也 法学部・准教授
高佐 智美 法学部・教授
岡上 雅美 法学部・教授
SCHIEDER, C.S. 経済学部・教授
佐竹 由帆 経済学部・教授
永山 のどか 経済学部・教授
杉谷 祐美子 教育人間科学部・教授

【要旨】

本稿は、2022年度に立ち上げられた青山学院大学・スクーンメーカー記念ジェンダー研究センター主催の指定型プロジェクト「青山学院大学におけるジェンダー教育カリキュラムの構築」の成果について論じるものである。

本研究プロジェクトは、本学のジェンダー関連科目の授業内容と方法論に関する検討を通じて、学生のジェンダーに対する理解の向上を目指して実施された。おもな研究方法は、ジェンダー関連授業を担当する本学教員および外部講師による研究会の実施であり、授業内容や授業方法に関して領域横断的に専門知識を高めることを試みた。

プロジェクトメンバーによる各発表では、ジェンダーという概念のもつ多角性や錯綜性から、知識や情報の伝達、議論や発表の進め方、学生対応などにおいて教員が試行錯誤を迫られる状況が明らかとなった。しかし、研究会を通して情報共有が可能になったことで、授業実践における創意工夫や効果的な授業方法などに関する視座を広げることができた。他方、本プロジェクトの成果を本学におけるさらなるジェンダー教育の構築にいかに関係づけられるかが課題として残された。

キーワード：大学教育、授業方法、ジェンダー論、女性学、フェミニズム論

はじめに

本研究プロジェクトは、本学スクーンメーカー記念ジェンダー研究センターが主催する指定型プロジェクトとして2022年度に立ち上げられた。研究の目的は、青山学院大学のジェンダー関連科目の授業内容と方法に関する事例分析および改善のための検討であり、学生のジェンダーに対する理解の向上を目指すものである。

研究方法としては、効果的なジェンダー教育カリキュラムの構築に向けて、ジェンダーに関連する授業を実施する本学教員を募り研究会を開催し、各々の授業内容や授業方法を共有し、意見交換を行うことで学際的かつ領域横断的なジェンダーの専門知識を高めることを試みた。また、プロジェクトメンバーのみでは網羅しきれないテーマや、ジェンダー関連授業において重要となりうる分野の専門家を学外からゲスト講師として招聘し、授業への導入の可能性について模索する作業も同時に進めた。

本稿は、プロジェクト期間中に各メンバーの発表を通じて共有された授業実践における創意工夫や奏功した方法論、直面した課題などを抽出し、今後のよりよいジェンダー関連授業のあり方、進め方について検討するものである。

I 本研究の背景と意義

日本では、北京女性会議¹が開催された1995年以降、大学教育においてジェンダー論および女性学関連の科目が積極的に導入されるようになった。国立女性教育会館の2000年（平成12年）の調査²によると、女性学関連科目を開設している大学は609校、開設科目数は2456と、1996年時の調査よりも大学数で2倍、科目数で3倍も増加するなど、女性学やジェンダー論に関する関心の高まりが見られた（国立女性教育会館 2002）。本調査当時、青山学院大学では男女共学の大学としては多い22科目の関連授業が開講されていた。

四半世紀が経過した現在、本学においてジェンダー（女性、フェミニズム、性差、セクシュアリティ、LGBTQなどを含む）を取り上げる授業の数は、およそ3倍の60科目以上

となっている³。ただしジェンダー論や女性学、フェミニズム論が科目名そのものに含まれる授業は、そのうちの3分の1程度にとどまっており、それ以外のほとんどが15回の授業回数のうち1回、2回程度をジェンダー関連テーマに割り当てているのが現状である。加えて、単純にジェンダーに関連したキーワードや情報を組み込んだ授業や、ジェンダー分野が専門ではない教員による独自の理解によって提供される知識や論点では、受講生のジェンダーに関する見識が十分に深まらないばかりか、かえって誤解が生じる可能性もある。他方、ジェンダーを主軸に据えた授業においても、担当教員が自らの教授法に不安を抱えている場合は少なくない。神村（2015）は、ジェンダー関連科目は、担当教員の授業の意図によって、あるいはその意図を越えて「受講者自身の行動や意識の準拠枠となる人生観・世界観・価値観の変容を伴う力を内包している」と指摘する（同掲：22）。本研究プロジェクトのメンバーも自身の授業で発信する言葉のひとつひとつが受講生にどのように伝わり、個々人の人生観や価値観とどのように影響し合うのかについて試行錯誤するなど、慎重な姿勢をとっている。

本プロジェクトは、以上のような課題を検討するために立ち上げられ、さまざまな学部の教員が、研究会での発表を通じて各々の研究分野からの知識や視座を提供し、授業に取り組む中で生じる疑問や課題、あるいは授業での創意工夫点や奏功した授業実践の事例などをプロジェクトメンバー間で共有することで、青山学院大学におけるよりよいジェンダー教育の構築に役立てることを目指した。また、研究分野を越えた教員間のネットワーク作りにも取り組み、今後のジェンダー教育／研究に関するさらなる事業の展開も視野に入れて実施された。

Ⅱ 研究の目的と方法

本プロジェクトの目的は、本学においてジェンダー教育を担う教員を募り、学部や学問分野を越えて研究会に参加することで①教員間のネットワークの構築を図るとともに、②教員各々の授業経験を通じて授業の内容や方法論を多角的に分析しジェンダー関連授業の質を向上させること、さらに③ジェンダー・カリキュラムや講座の開設、教科書や参考書の出版の可能性へと繋げることであった。

この目的に沿って、2022年度に3回、2023年度に2回、計5回の研究会を実施した⁴。詳細は次節で後述するが、各研究会において発表者は、シラバスに沿った授業計画においてどのような目的と方法論を用いて授業に取り組んでいるのか、その際に学生はどのような反応や理解を示すのかを事例分析し、課題と展望を示すよう努めた。研究会における発表者と発表テーマは下記の表1の通りである。

表1：研究会の発表者および発表テーマ（報告者作成）

日 付	発表者	発表テーマ
[第1回] 2022年9月9日	菅野美佐子	ジェンダー関連授業の現場から：社会学および人類学の視点
2022年9月9日	梅垣千尋	ジェンダー関連授業の現場から
[第2回] 2022年12月17日	谷口洋幸	法学分野における性の多様性に関する授業実践
2022年12月17日	西山千恵子	ジェンダー関連授業の現場から
2022年12月17日	下村沙季マリン	ジェンダー関連書籍の動向
[第3回] 2023年5月14日	福嶋裕子	キリスト教理解関連科目における授業実践
2023年5月14日	高橋幸子	大学生への性教育の可能性
[第4回] 2023年9月5日	砂川秀樹	大学におけるLGBT教育について：当事者の立場から
2023年9月5日	森本麻衣子	砂川秀樹先生ご著書『新宿二丁目の文化人類学』を読む

Ⅲ 活動（研究会）の概要

1. 2022年度の研究会の概要

2022年度の第1回目の研究会では、プロジェクトメンバーである菅野美佐子（地球社会共生学部「ジェンダーの社会学⁵」担当）、梅垣千尋教授（コミュニティ人間科学部「女性と政治参加⁶」担当）が、各々のジェンダー関連授業での取り組みや授業を通して見えてきた課題についての報告を行った。

菅野の報告では、男女平等や性的マイノリティの権利などについて講義を通じて理解の深化を目指しつつも、教員によるジェンダー観の一方的な押し付けにならないための試みとして、ジェンダー・ハンドブック作成プロジェクトを導入し、掲載するテーマ決めやコンテンツの構成、そのためのリサーチや編集作業などを全て学生に行ってもらおうという取り組みが紹介された。授業を通しての課題としては、グループワーク中にジェンダー役割（男子学生＝リーダー役、女子学生＝サポート役）が生じたことであり、そうしたある種日本社会に特徴的なジェンダー役割について、教員は否定して絶対的な男女平等主義をよしとするべきなのか、あるいは「女性ならではの」、「男性ならではの」特性を尊重しつつ、それぞれの性別役割に応じたより良い生き方を学生と共に模索するべきなのかという、判断と指導の難しさなどが取り上げられた。

梅垣報告では、女性の政治参加の多様性や複雑さを受講生に理解してもらうための試みとして、イギリスの歴史から「女性が君主、首相になる際に女性であることのプラス要素・マイナス要素は何か」といったテーマについて議論や記述をする課題を出したり、日本における女性天皇の可否に対するディベートをするなどの授業方法が紹介された。授業を通じて見えてきたこととしては、学生には上記のような意見が分かれたり、より深く背景がわからないと議論が深まらないようなテーマ設定をして課題やディベートに取り組ませるものの、「ジェンダー平等の実現が重要」といった紋切り型の反応しか返ってこない場合

も一定程度見られ、「男女平等」の定義やその実現に向けた社会的・政治的行動の複雑性、錯綜性をいかにして理解してもらうかという点が課題として指摘された。

第2回研究会では、メンバーの西山千恵子氏（兼任講師「ジェンダーとフェミニズム（青山スタンダード科目）」⁷）担当のほか、ゲストスピーカーとして法学部の谷口洋幸教授（法学部「ジェンダーと人権」、「性的マイノリティと人権」⁸）などを担当）によるジェンダー関連授業に関する発表を実施した。さらに、本研究のプロジェクト成果としてジェンダー教育関連の書籍出版を視野に入れてプロジェクトを進めていたため、近年のジェンダー関連書籍の動向について、ジェンダー研究センターの助手である下村沙季マリン氏による報告を聴講した。

谷口報告では、ジェンダーや性的マイノリティの人権に関する講義のなかで、教員の意見を示すのではなく、できるだけ訴訟の判例やデータなどの事実のみを提示し、学生にはその情報をもとに教員が用意した質問について議論し回答してもらうという取り組みが紹介された。本報告では、受講生の反応から感じた懸念事項や課題として、多くの学生がジェンダーとはすなわちLGBTQを示す概念と認識しており、授業で女性差別や男女平等の内容をあつかうと驚かれるというのが近年の傾向としてあること、性的マイノリティは差別を受ける可哀想な人々というイメージが先行し、彼らに対する思いやりや優しさの人権だと誤認していることなどが取り上げられた。すなわち、女性差別にしろ、性的マイノリティに対する差別にしろ、その背景にある家父長制やジェンダー規範というより大きな枠組みや、法政策の仕組みや判例のプロセスなどには学生の問題意識が向いていないことが示された。

西山氏による報告では、ジェンダー・フェミニズム論に関する自身の授業のなかで、その時々を受講生の状況などに応じて、アクティブラーニング形式や講義形式など複数の授業手法を試行錯誤しながら取り入れ、学生の関心を惹きつける授業づくりに取り組む様子が報告された。その中での課題点としては次のようなものが挙げられた。ひとつは、谷口報告同様に、学生のあいだではジェンダーという概念が性的マイノリティと同義で理解される傾向が見られる点である。つまり、学生の間では、フェミニズムや女性学は女性差別に苦しみ、差別と闘った一世代、二世代前の女性たちの話であって、現代とは関係のない時代遅れで古臭いものというイメージが強い。他方、LGBTQに関する事象や社会の動きは、よりファッショナブルで「いまどき」のトレンドであるという認識を持っている。こうしたイメージの先行によって、依然として続く男女格差や女性差別、あるいは現代女性が直面する女性であるがゆえの生きにくさなどに向き合おうとしない学生が増えていることが指摘された。また二つ目として、現在の学生たちは中等、高等教育のなかで性教育を受けた経験が不足していることが指摘され、最後の砦となる大学教育の中で性に関する「正しい知識」を伝えていくことの重要性が今後の課題・展望として示された。

2. 2023年度の研究会の概要

2023年度は、外部講師2名を招聘し、ジェンダー授業のあり方について検討する2回の研究会を実施した。本プロジェクト第3回目の研究会では、福嶋裕子教授（理工学部「聖書の中の女性たち⁹」担当）と外部講師として招聘した高橋幸子氏の2名による報告が行われた。

福嶋報告では、旧約および新約聖書において、聖書が作成された時代の女性の地位や立場がいかなるものであったのかを、当時の社会文化的な背景やジェンダー役割、ジェンダー規範への理解も含めて解釈するという授業の中での課題点やそれに対する挑戦に関する紹介がなされた。授業に対する学生の反応からみた問題点として指摘されたのは、とくにキリスト教を信仰する男子学生にとっては、女性は神によって男性から生み出された生き物である（人間＝男性であり、女性は人間ではない）というこれまでの解釈が覆され、聖書が作られた当時から女性がいかに虐げられた存在でありながらも、強く逞しく生きていたのかという女性を中心とした聖書解釈がなされることに対する戸惑いと抵抗である。その一方で、聖書における女性の地位に関して漠然とした不満や憤りを感じていた女子学生には、女性を主体に聖書を捉え直そうとする視点に肯定的な印象もあったという。ただし、とくに男子学生のあいだではフェミニズムへの抵抗感も強く、そのため、フェミニズム神学は単にセクシズムに立脚するものではなく、人種差別主義や階級主義、帝国主義、軍国主義、人間中心主義などと共通する「支配のパターン」から多様性を認める世界への移行を目指すものであるという理解を促すことが重要だという指摘がなされた。

高橋報告では「大学生への性教育の可能性」というテーマで、これまでの自身の性教育の実践経験から、大学においていかにして効果的な性教育の授業が実施できるのかについての報告がなされた。高橋氏は、埼玉医科大学・医療人育成支援センター・地域医学推進センターにおいて産婦人科医として医療業務に従事する傍ら、若者の性に関する知識を普及するために、性教育に関する書籍の執筆やメディア出演、YouTube監修など幅広い活動に取り組んでいる。同氏は、中等および高等教育のなかで性についての正しい知識を学ぶ機会を十分に持たないまま大学に進学する若者が多く、オンライン上の偏った情報や誤った情報にアクセスして性の知識を獲得しようとする行為を危惧している。とくに性的同意に関する意識の低さや、自慰行為に関する誤った知識、低用量ピルの服用に関する偏見など、若年層の性にまつわる心身の健康に重大な影響を及ぼしかねない知識や行為については、気軽に相談できる個別の相手やコミュニティ、さらに医療機関や大学を含む相談サービスなどの存在の重要性を示唆した。以上の点を鑑みると、西山報告でも言及されたように大学でもジェンダーの授業を通じて性教育をテーマとして導入する意義や必要性があり、その効果としては、学生が性について考える契機づくり、学術的資料に基づいた知識の提供、性についての疑問や悩みに関する（医療機関や専門家への橋渡し役としての）相談窓口となる可能性などが挙げられる。医療従事者としての高橋氏の報告では、教員でもあつかいにくい「性」というテーマを大学の授業でどのように教授できるかという課題

に対してきわめて示唆的な内容が提供された。

2023年9月5日に実施された第4回目の研究会では、砂川秀樹氏と森本麻衣子准教授（法学部「社会調査論¹⁰」担当）による報告が行われた。

砂川氏は、1990年代からHIV/AIDSに関する社会活動やゲイコミュニティの啓発活動などに取り組んでおり、2000年には「東京レズビアン&ゲイパレード2000」の発起人として実行委員長を務めた。また、文化人類学者として新宿二丁目で行ったフィールド調査によるエスノグラフィー（博士論文として執筆）を著書『新宿二丁目の文化人類学：ゲイ・コミュニティから都市をまなざす』として2015年に出版している。砂川報告では、LGBTの当事者として、どのように大学での授業に取り組んできたのかが紹介され、大学生の性的マイノリティの現状に関する知識や権利に対する意識を深めるための方法論や教員としての心構えについて、いくつかの重要点が示された。例えば、LGBTを同一カテゴリーとして一括りにして捉えるのではなく、その中の個性や多様性を想像すること、また性的マイノリティを支援が必要な人たちとみなして、「助けてあげる」、「理解してあげる」といった見下しの対象とするのではなく、性的指向の分類の一つとしてヘテロセクシュアルやシスジェンダーといういわゆる性的マジョリティと同等の領域において並列的に位置付けること、さらに、性的マイノリティへの嫌悪感を変えられなくても態度や行動は変えられることを学生に認識してもらうような授業展開が提案された。

森本報告では、砂川氏の発表を受けて、同氏の著書『新宿二丁目の文化人類学』を解題しながら自身の授業（「社会調査論」）に、性的マイノリティの当事者の視点をどのように組み込むことができるのかという観点から検討が行われた。本報告では、この著書の中で触れられる著者から見たゲイ・コミュニティとしての新宿二丁目の姿とは、ゲイが「故郷」と呼べるような場所で、なおかつコミュニティの絆が強く形成される場でもあり、メディアによって植え付けられている「犯罪」や「自由奔放」といったイメージとは必ずしも合致しないという部分に着眼点が置かれた。それを踏まえた上で、授業では学生たちに社会の支配的言説のなかにある偏見や、そのことが生み出す当事者の生きづらさに気づいてもらうこと、セクシュアリティは固定化されたものではなく、社会関係の中で形成されるという視点をもってもらうこと、さらに質的調査を行ううえで重要な認識として、調査者が調査対象とどのような関係を切り結ぶかによって、調査者に見えるもの、聞こえるもの、書けるものが変わることを伝えていく意義について言及がなされた。

以上見てきたとおり、研究プロジェクトメンバーによる報告に加え、外部講師を招聘しての講演を実施したことは、ジェンダー関連授業に関するメンバー内での専門的知識の拡大と視野の多角化に大いに資するものとなった。とくに性的マイノリティの地位向上運動に関わる活動家、現場で妊娠・出産というセクシュアルなものとしての身体に向き合う医療従事者の知見を得られたことで、性の多様性、身体の大切さをいかに授業の中で伝えていくのか、ジェンダーやセクシュアリティの問題や悩みを抱える学生にどのように寄り添うことができるのかという課題に対して、具体的で深い知見を獲得することにつながった

と言える。

Ⅳ 授業実践（「ジェンダーの社会学」）の事例から

1. 授業の目的および内容と運営方法

前節では、各教員における授業への取り組みと課題を概観したが、授業に対する多くの教員に共通した関心は、教員による意見の押し付けにならないような柔軟な授業運営についてであった。実際に授業を実施してみると、教員の意図とは反したり、まったく予想していないような反応が返ってくることもあり、教員には、そうした反応にどのように応答しながら授業を進行していくのかに常に細心の注意を払うことが求められる。そこで本節では、プロジェクトリーダーである報告者自身が地球社会共生学部において実施した「ジェンダーの社会学（英語講義）」を取り上げ、授業実践の具体的な事例から、授業内容や運営方法の詳細な提示と課題の検討を試みる¹¹。本講義では、我々が日常的に実践するジェンダーの規範や役割や慣習が社会構造、制度、権力関係によって形成されていることを理解し、ジェンダーとセクシュアリティの概念および理論を批判的に探求することを目的に授業設計を行なった。また、科目名には「社会学」とあるが、報告者の専門分野が文化人類学であることから、ジェンダーが人種、階級、民族、宗教など、社会・文化的要因が重なり合うことで構築、強化される仕組みの理解を講義の主軸とした。加えて、日常生活において自明視されているジェンダーをめぐる行為や思考を、さまざまな地域のそれと比較することで相対化することも目的のひとつとした。

表2：「ジェンダーの社会学」における講義テーマ（筆者作成、テーマはシラバスでの表示言語のまま）

1	Course Guidance (Online Class)
2	Marriage, Family and Gender(1) : Household work and caregiving
3	Marriage, Family and Gender(2) : Gender Socialization in Childhood
4	Gendered Body : Menstruation and Women's Lives
5	Gendered Body : Lookism
6	Gendered Body : Masculinity
7	Gender Based Violence : Sexual Consent and Equal Partnership
8	Gender at Work(1) : Gender Typing Jobs, Hierarchies, and Workplace expectations
9	Gender at Work(2) : Gendered and Sexualized Labor in Global Economy
10	Gender and Development : Feminization of Poverty and Women's Empowerment
11	Gender and Development : Feminization of Poverty and Women's Empowerment
12	Transgender and Intersex : LGBTQ Identities and Challenges
13	Intersectionality and Micro-aggression
14	Presentation
15	Presentation

本講義の各授業回のテーマは、家族生活を通じたジェンダーの社会化、ルッキズムや生理（性と生殖）や性をめぐる暴力などの身体に関わる問題、社会・政治・経済における男女格差、性的マイノリティに対する差別と権利などであり、ジェンダーとセクシュアリティに関する主要なテーマを網羅的に取り上げている（表2参照）。この授業では、講義のほかにグループディスカッション、ロールプレイ、ディベート、アンケートやインタビューなどによる調査、プレゼンテーションといったアクティブラーニングの手法を導入した。アクティブラーニングを取り入れた理由としては、ジェンダーやセクシュアリティに関わる問題は受講生自身が日常生活のなかで各々経験し直面していることを意識化させ、当事者として、あるいは他者への配慮として、その問題にどう向き合うのかを考えてもらうためである。また、ジェンダーやセクシュアリティへの視座は各人の価値観や人生観と深く関係しており、正解がひとつではないため、受講生各々の受け止め方を互いに共有することで、課題への理解を深めることをねらいとした。

2. 授業「ルッキズム」に対する学生の反応

さまざまな授業テーマの中で、とくに受講生の意見が多様化するテーマのひとつがルッキズムであった。この授業回では、受講生は事前に雑誌や街中で見かける看板広告、電車の中吊り広告の写真を撮影し、どのようなジェンダー的意味が読み取れるかを分析し発表を行なった。例えば、スカートをファッショナブルに着こなしたり、美しくメイクアップした男性モデルを掲載した雑誌や看板広告の写真から、男女の区別を超えて美しさを探求するジェンダーレスな表現を肯定的に捉える社会的風潮が生まれつつあることが指摘された。他方、顔の二重整形を宣伝する電車の中吊り広告では、二重顔の女子高生が生き生きと楽しそうに校庭を駆け抜ける写真から、認知力の未成熟な高校生に対して二重顔であることが明るい高校生活をもたらすという観念を植え付けているといった批判的分析がなされた。また、YouTubeの広告動画から、太っていることで夫に浮気され自信を失った女性が、痩身のサプリメントによってスリムになり、妻の元に戻ろうとする夫に別れを告げて新しい恋人と人生をやり直すというストーリーを取り上げ、太っていることは不幸であり、痩せていることが幸せであるという意識が助長されていることを批判する受講生もいた。このほか、太った容姿と痩せた容姿をビフォア・アフターとして対照的に提示し、後者を人生の成功者のように演出したフィットネスジムの広告写真、さらに脱毛によってかわいらしく清潔感あふれる雰囲気をもった女性の写真や、それとは対照的に脱毛によってセルフケアを怠らない「できる男」を演出した男性写真を使用した脱毛サロンの広告なども取り上げられた。

このようにルッキズムを助長するメディア戦略を批判的に捉える受講生が多数いる一方で、脱毛や整形、ジム通いによって「理想の見た目」を手に入れようとする行為について、あくまで個人の嗜好の問題であり、ルッキズムとは言えないという意見が多く聞かれた。同様に、本学における「ミス／ミスター青山」の開催についても、応募資格として体型や

容姿に条件が設けられておらず、関係者が楽しんでいるのであれば、必ずしもルッキズムには当たらないという回答も見られた。下記は2024年度前期授業後の受講生によるコメントの一例である¹²。

「今日のディスカッションでは、ルッキズムへの批判が社会的に過熱していると感じた。議論の過熱は表現の不必要な縮小を招きかねない。ルッキズムとは、外見に対するヘイトや理不尽な差別であり、理想の容姿を示唆するものではないことを、理解すべきである。」
(3年生、男子学生)

「人それぞれだが、私の考えでは、体のつくりや見た目に気を配っている人のほうが魅力的だと思う。」(3年生、女子学生)

「美的資質を高く評価することは個人的な嗜好となりうるが、それが特定の美の基準に適合しない人々に対する不当な扱いや差別につながる場合は問題となる。したがって、外見の多様性を認め、賞賛することは肯定的なことではあるが、こうした個人の好みが他人の価値や人格の判断に影響を与えることを避けることが肝要である。」(3年生、女子学生)

「ルッキズムの解決が難しい理由のひとつは、人々が本能的に他人の外見を重視しているからである。これは人類に備わった本能である。したがって、「外見で他人を判断するな」というのはあまり効果的ではない。(中略) 私の考えとしては、日本の美の基準を多様化させることが最善の方法である。」(4年生、女子学生)

本講義の目的の一つは、ルッキズムという差別の形態を理解すると同時に、それを助長するメディア戦略とその背後にある商業主義や行きすぎた資本主義に私たちが無意識のうちに巻き込まれている事実、さらに日本社会のある種の同調圧力によって、ヘアスタイルやファッション、メイクアップなどにより容姿が均質化され、その基準から外れた人々に対して差別を生み出す社会・文化的構造への気づきである。前半の講義部分でこれについて説明したうえでディスカッションを進めたが、多数の受講生が、外見は個人の好みであること、個人が理想とする外見に近づこうとすることも個人の選択であること、他者に害が及ばず、当事者の満足感というレベルにとどめられているかぎり、外見を追求することはルッキズムにはならないことを感想として取り上げていた。すなわち、ルッキズムをもたらし社会全体の構造を問題とする教員と、個人の意思を重んじる受講生との間でルッキズムに対する認識や考えに乖離が見られた。しかし、こうした教員と受講生による思考の乖離は、ジェンダーやセクシュアリティをめぐる問題に対する意識や価値観が多様であり、ある意味で正解がないことを物語っており、教員は自分の意図を越えて生み出される学生の見識をどこまで尊重し、どこまで自らの意図する方向へといざなっていくのかという線引きを迫られることになる。加えて、担当教員(筆者)自身の専門分野である文化人類学の視座に立脚すれば、日本社会に特徴的な、同調圧力が生じやすく、外見も含めてさまざまな事柄に対する価値意識とそれに伴う行動が均質化しやすい社会文化的傾向につい

て、必ずしも否定するのではなく、相対化して捉えることが重要となる。こうした教員の立場が、授業において教員から発信されるメッセージ性を弱めている可能性も否定できない。極端な事例で言えば、FGM（女性器切除）¹³など女性の身体を傷つけ、女性の健康や生命を奪いかねない慣習に対して、フェミニズムの視点からは確固とした批判的主張ができて、文化相対主義的な視点からは当該社会の価値規範を完全には否定できず、ある程度尊重する視点も必要となる。学生にとっては指導する立場の教員がどっちつかずの状態であることでのフラストレーションを感じることもあるだろう。ジェンダー関連授業においては、学生にとっても教員にとっても、正解のない問いにいかにか答えを見出していくのが大きな挑戦であると言える。

V 授業実践における課題

上記のような授業運営上の難しさは、本プロジェクトメンバーのほとんどが、多かれ少なかれ同様に抱えている共通の課題であった。研究会での発表と議論を通じて明らかとなった共通の課題としては、おもに次の3点が挙げられる。

1. ジェンダーをめぐる多様な価値観を損なわないための伝達方法の検討
2. 性自認や性暴力、性行為など敏感なテーマをあつかう際の学生への配慮
3. 性的多様性を表面的な理解で終わらせないための内容の精査

以下ではそれぞれの課題についての各メンバーの取り組みなどを紹介しつつ、よりよいジェンダー関連授業のあり様について検討したい。

1. 多様な価値観を尊重した伝達方法

プロジェクトメンバーが授業運営において最も重視している課題のひとつが、前節でも触れたとおり、ジェンダーやセクシュアリティをめぐる問いに関して、受講生の感覚や意識、価値観などをいかに尊重すべきかである。ジェンダーにまつわる事象や行為は日常生活において誰もが経験しており、当事者の育ってきた環境や周囲の人々との関係性、そしてそこからもたらされる価値観や世界観に密接に関係している。したがって、担当教員が考える「正しさ」と受講生それぞれの考えるそれとは異なる状況もしばしばみられる。また、学生の意見の中には、特定の性別や性的指向をもつ人々を傷つけるようなものが含まれている場合もある。その際に教員の意見を押し付けてしまわずに、いかにより良い方向へと回答を導いていくのかについて、メンバーのあいだでは次のような取り組みが見られた。

- ・教員の意見はあまり提示せずに、事実やディスカッションのための問いなどを提示して、学生に考えてもらうようにする。グループでディスカッションする際には書記役の

学生に話し合った内容をメモしてもらい、授業後にPDFで他のグループの学生にも共有する。

- ・授業内容に対する受講生の反応を（学生のプライバシーに関わる部分などセンシティブなものをのぞいて）受講生間で共有することで、意見が多様であることを理解すると同時に、その中で誰かを傷つけたり差別したりするような不適切なコメントについては、教員が介入する前に学生同士で議論させ、必要であれば教員もコメントをする。
- ・時には学生に遠慮することなく、教員が学生に対して厳しいコメントやはっきりと意見主張をする。そのような指導が学生の心に響いたり、記憶に残ったりと功を奏する場合もある。

上記のように、学生同士の議論を重視する手法は、教員というある種の権力を帯びた存在が介入することで学生の意見や主張の可能性を低めたり、議論の幅を狭めたりする状況を回避することがねらいである。ただし、学生間でも発言の力関係が介在する場合もあるため、強引な主張が「正解」とならないような配慮は必要と言える。

2. 敏感なテーマを扱う際の学生への配慮

ジェンダー関連科目では、性的マイノリティをはじめ、家庭内暴力やデートDV、セクシュア・ルハラスメントといったテーマを扱うことになるが、ジェンダー科目を受講する学生の中には少なからず当事者がいる可能性があり、研究会では、担当教員がその可能性を前提に授業を進めることが重要であるという議論がなされた。例えば谷口教授の発表では、受講生が安心安全に受けられる授業運営が必要不可欠であることが指摘され、そのために配慮すべき点として以下のような方法が挙げられた。

- ・グループディスカッションを進める際には、個人の性的指向や性自認、ジェンダー・セクシュアリティに関わる経験、体験といったプライバシーや当事者性を問うようなディスカッション・クエスチョンを避ける。
- ・教員のみならず受講生に対しても、当事者がいる可能性を意識してもらい、他者を傷つけるような発言に関しては、教員が介入し注意を促すようにする。
- ・虐待、性暴力、性的マイノリティのいじめといったトラウマを抱えている学生への対応として、授業をいつでも離脱できる状況を作っておく。例えば、途中離脱を希望した学生が授業外に聴講できるよう授業を録画したり、グループディスカッションのメモを共有したり、課題を設定しその提出をもって出席とみなすなど。
- ・授業の進め方が適切であるかどうかについて学生から定期的に意見を収集する。

加えて、当事者である学生から、教員がカミングアウトや相談を受ける可能性があり、実際に相談を受けた経験をもつメンバーも少なくない。そのため、そうした学生への対応

に関する心構えと知識や情報の獲得も必要である。

3. 表面的な理解や結論で終わらないための授業運営

最後の課題としては、教員がさまざまな趣向を凝らした授業を設計し、ジェンダーをめぐる問題について議論を深めようとしても、理解が表面的で、なおかつ安易で短絡的な結論を出そうとする学生も一定数いるということである。そもそもジェンダー関連科目を履修する学生のなかには、ジェンダー概念に対する知識や理解をほとんど持たない者や、誤った理解をしている者も少なからず含まれている。近年のSDGsブームを受けて、その目標の一つであるジェンダー平等に焦点が当てられるようになってからは、ジェンダーという概念がトレンド化し、それを理由に受講する学生も多い。また、多くの受講生にとってジェンダーはLGBTと同義であり、LGBT当事者の声を聞きくこと、そして彼らに共感することで、最新の社会問題に強い問題意識をもち、弱者に配慮する「自分」を自己演出しようとする傾向もある。就職活動でのアピールポイントになると考える者もいるようだ。こうした状況のなか、ジェンダーの領域から性的弱者としての女性の視点が抜け落ちる状況も生じている。学生の中には、女性の地位や権利の問題は先進国である日本とは無関係であり、すでに男女の平等は確立されていると信じている者もあり、ジェンダーギャップ指数¹⁴の日本のランキングを知って愕然とするといった場面も見られる。他方では、ツイッターなどのSNS上で展開されるラディカルなフェミニズムの言動に影響される学生もあり、例えば2023年に最高裁で下された生殖不能手術を違憲とする決定¹⁵に対して、トランスジェンダー女性の公共トイレや更衣室の利用に関して、女性を装った男性による性犯罪が増加するといった強い不信感や反発を表明する傾向も出てきている。本プロジェクトメンバーのあいだでは、このように学生がジェンダーやセクシュアリティに関わる事象や問題を短絡的に捉え、それを生み出す政治、経済などの仕組みや社会文化的な構造というより深い部分にまで意識が向かない、あるいは理解が及ばないという現状に強い危機感が示された。こうした状況への対応については、各メンバーともに、授業を通して状況に応じて柔軟に応答しつつ、より深い議論につながるような問い（ディスカッション・クエスチョンおよびリサーチ・クエスチョン）を設定して、ディスカッションやディベートの機会を増やしたり、自分たちで調べてもらい発表の機会を設ける、あるいは授業外でもジェンダーについて学べる機会としてジェンダー関連の参考文献やセミナー、イベントを紹介するなど工夫しながら、15回という限られた授業のなかで、どこまで議論と理解を深められるかを試行錯誤していることが共有された。

上記のような種々の課題やそれに対する取り組みは、異なる研究領域のメンバーによる報告や議論が実現してこそ見えてきた新たな知見であるといえ、これらの知見を今後どのように活かしていくのか、あるいは外に向けて発信していくのかについては、さらなる検討の余地があると考えられる。

おわりに

以上、本研究プロジェクトでの活動を通じて、教員の多様な学問領域や授業経験の共有が、より良いジェンダー授業の構築においてきわめて重要であることが示唆された。4回にわたる研究会のなかで見えてきたのは、ジェンダー概念の持つ複雑さである。すなわち、「性的マイノリティ」という言葉はLGBTを示すこともあれば女性を指すこともある。またLGBTコミュニティの間でも性差別はありうるし、女性の間でも格差や差別もあれば、LGBTの権利に疎い者やヘイトの姿勢を示す者もいる。女性にとって生きづらい社会であれば男性にとっても生きづらい社会でありうるし、LGBTに厳しい社会であるということは、ヘテロセクシュアルやシスジェンダーの人々にとっても難しい社会となりうる。このように、ジェンダーというテーマは、「人間は誰しも差別の被害者にも加害者にもなりうる」という社会の両義性を反映している。それゆえにジェンダー関連の授業は、ジェンダーという概念の枠を超えて、複雑で多様かつ権力性や暴力性を帯びた世界の現実を学生に批判的に伝達すると同時に、その状況をいかに変えていくかという視点を育てる役割も果たしている。

本プロジェクトで得られた成果は、プロジェクト立ち上げ当初に掲げた3つの目標のうち、本学におけるジェンダー授業担当教員間のネットワークの構築と、ジェンダー教育の質の向上という2つの達成につながったが、3つ目の目標であるジェンダー・カリキュラムや講座の開設、教科書や参考書の出版に関しては、残念ながら期間内に達成することはできなかった。しかし、3つ目の目標を果たしてこそ、2つの達成事項の成果が意味をなすと言え、今後も可能であれば、ジェンダー研究センターと連携するかたちで、より多くのジェンダー授業担当教員とのネットワークを構築し、オムニバス形式でのジェンダー授業の開講やジェンダー教科書の作成、ゲスト講師を招いてのセミナーの開催など、プロジェクト成果を広く発信していく機会を見出していきたいと考える。

【注】

- 1 1967年の国連総会における女性差別撤廃宣言採択を受けて、1970年の国連女性の地位委員会では法的拘束力のある条約の必要性が確認され、これが1979年採択の女性差別撤廃条約となった。1975年にはメキシコシティにて第1回目の世界女性会議が開催され、その後5年ごとに国連主導で女性のための国際会議を開催することとされ、2回目の1980年にはコペンハーゲン、3回目の1985年にはナイロビ、さらに1995年には北京で第4回世界女性会議が開催されている。とくに北京女性会議では女性のエンパワーメントに焦点が当てられ、女性の権利や地位向上を改めて見直す動きが活発化し、このことが日本における男女共同参画の推進および高等教育機関における女性学・ジェンダー論関連科目の増加につながったと言われている。
- 2 国立女性教育会館は、1983年（昭和58年）から2001年にかけて、全国の大学を対象に「高等教育機関における女性学関連講座開設状況調査」（第8回目より「女性学関連科目等の調査」

- へと名称変更)を10回に渡って実施し、大学におけるジェンダー教育の推移の把握を行なった(館 2002)。
- 3 本学「時間割・講義内容検索」サイトを参照 (<https://syllabus.aoyama.ac.jp/>)。
 - 4 5回のうち1回(初回:2022年5月に実施)は、プロジェクトメンバーの顔合わせの会であり、それぞれの研究分野を含めた自己紹介とプロジェクトの今後の展望などについての協議を実施した。
 - 5 地球社会共生学部の専門科目(応用科目I群)として開講。
 - 6 コミュニティ人間科学部の学科科目(第II群(女性活動支援プログラム科目))として開講。
 - 7 青山スタンダード科目(テーマ別科目の社会理解関連科目(領域C))として開講。
 - 8 「ジェンダーと人権」、「性的マイノリティと人権」とともに、法学部ヒューマンライツ学科のコア科目として開講。
 - 9 青山スタンダード科目(テーマ別科目のキリスト教理解関連科目(領域A))として全学2年生～4年生に開講(青山キャンパスおよび相模原キャンパスにて隔年で開講)されている。
 - 10 法学部ヒューマンライツ学科の入門科目として開講。
 - 11 本節で事例とする授業は2024年前期に地球社会共生学部で開講されたものであり、29名(うち5名程度が留学生、5名程度が帰国子女)が受講しており、そのうち20名前後が毎回の授業に出席していた。
 - 12 コメントは英文で記述されたものを筆者が日本語に翻訳したものである。
 - 13 アフリカを中心に見られる女性のクリトリスや外性器の一部または全体を切り取る慣習であり、女性の純血性を示し、より良い結婚ができるという信仰のもと受け継がれてきた。女性器切除は、乳児期から15歳ごろまでの少女に施され、感染症や生理不順、激しい痛み、排尿困難などを引き起こし、人権団体からは激しく非難され、国連などを中心に廃止運動が続けられている。
 - 14 世界経済フォーラムが毎年発表しているランキングであり、経済活動や政治における参加率、教育水準、健康などの4分野における男女の平等性が算出され、各国のランクづけを行うものである。2024年の日本のランキングは146カ国中118位と低く、先進国の中では最下位となっている。主な要因は政治における女性の参加率の低さであり、女性の国会議員数の低さなどが関連している。詳細については世界経済フォーラムのページ (<https://www.weforum.org/publications/global-gender-gap-report-2024/>) を参照されたい。
 - 15 2023年の10月に最高裁は、性別を変更するための要件として性適合手術を受けるという要件が「強度の身体的侵襲である手術を受けるか、性自認に従った法令上の取り扱いを受ける重要な法的利益を放棄するかという、過酷な二者択一を迫っている」と指摘し、「意に反して身体への侵襲を受けない自由」を侵害するものであり、憲法13条に違反しているという決定を下した(朝日新聞デジタル 2023)。これに対して「女性のスペースを守る会」などの一部の団体が、生物学的男性は女性用トイレや更衣室を利用するなど女性スペースを侵してはならないという意思を表明するなど、性的マイノリティの人権を守る団体との間で対立が生じている。

【参考・引用文献】

朝日新聞デジタル（2023）「トランスジェンダー性別変更、生殖不能の手術要件は「違憲」最高裁 [2023年10月25日]」（<https://www.asahi.com/articles/ASRBP7T8YRB NUTIL009.html>）[1月14日閲覧]。

神村早織（2015）「教員養成系大学におけるジェンダーと教育に関する科目としての試み：「ジェンダーとセクシュアリティ」の授業から」『教育実践研究』第9巻、pp.21-28。

砂川秀樹（2015）『新宿二丁目の文化人類学：ゲイ・コミュニティから都市をまなざす』太郎次郎エディタス。

館かおる（2002）「「高等教育における女性学・ジェンダー論関連科目に関する調査」（第10回）の概要と課題」『国立女性教育会館研究紀要』第6巻、pp.85-96。

内藤和美（2003）「「高等教育機関における女性学・ジェンダー論関連科目に関する調査」（第10回）－教員調査（科目調査）記述回答の整理から」第7巻、pp.93-108。

World Economic Forum（2024）“Global Gender Gap 2024:Insight Report”（https://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2024.pdf）[2025年1月14日閲覧]。

Toward Better Gender Education at Aoyama Gakuin University: Challenges and Prospects Revealed by a Research Project

Misako Kanno

This paper discusses the outcomes of the designated project “Construction of a Gender Education Curriculum at Aoyama Gakuin University,” initiated in 2022 under the auspices of the Schoonmaker Memorial Center for Gender Studies at Aoyama Gakuin University.

This research project was conducted with the aim of improving students’ understanding of gender issues through an examination of course content and methodology in gender-related subjects at the university. The main research method was the holding of workshops by university faculty members and external lecturers in charge of gender-related courses, to increase cross-disciplinary expertise in course content and methods.

Each presentation by the project members revealed that the multifaceted and complex nature of the concept of gender required the teachers to undergo a process of trial and error in the communication of knowledge and information, the facilitation of discussions and presentations, and the responses to students’ questions and reactions. This information sharing through the workshop led to a broadening of the members’ perspectives on creative and effective teaching methods for their classes. A new challenge is how to apply the outcomes of this project to the further development of gender education at the University.

Keywords : University education, Teaching methods, Gender studies, Women’s studies, Feminist theory

寄稿エッセイ

スクーンメーカーが蒔いた「宣教の種」150年後の実り

ー グランディ郡歴史協会博物館ドーラ・E・スクーンメーカー常設展示に至る経緯 ー

河見 誠

【要旨】

青山学院は1874年11月16日ドーラ・E・スクーンメーカー宣教師により始められた麻布の女子小学校からその歴史がスタートし、2024年に創立150周年を迎えた。まさにその2024年、アメリカイリノイ州のグランディ郡歴史協会博物館において、ドーラ・E・スクーンメーカー常設展示が開始されることとなった。

ドーラが日本で蒔いた「宣教の種」は、150年後に今度はアメリカに還流して、ドーラが育ち、宣教を決意し、そこから日本へと旅立ったグランディ郡に蒔かれることになり、常設展示という形で新たに花を咲かせはじめたのである。これは決して意図された企画ではなく、関わった者たちの思いを越えて波紋のように広がっていったムーブメントであり、それ自体ドーラと向き合い対話するプロセスであった。本稿は、この展示が未来に向けて、国境を越えたさらなるムーブメントの出発点となることを期待しつつ、その約一年の経緯を報告するものである。

キーワード：ドーラ・E・スクーンメーカー、常設展示、グランディ郡歴史協会博物館、青山学院創立150周年、宣教の種

I はじめにー常設展示の意義ー

青山学院は1874年11月16日ドーラ・E・スクーンメーカー宣教師により始められた麻布の女子小学校からその歴史がスタートし、2024年に創立150周年を迎えた。まさにその2024年、アメリカイリノイ州グランディ郡モリスのグランディ郡歴史協会博物館 (Museum of the Grundy County Historical Society. 以下「博物館」という。) において、スクーンメーカー常設展示が始まり、6月29日にオープニングセレモニー (Opening Ceremony for the Dora E. Schoonmaker Exhibit) が催行された。

ドーラは5歳の時に一家でウィルミントン (Wilmington) に移住してきて、8歳で海外宣教への志を抱く。その後13歳の時にシャナハン (Channahon) に引っ越し、高校卒業後、モリス (Morris) で小学校の教師となる。その約4年間の教師経験を経てメソジスト

監督教会夫人海外伝道局 (Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church. 以下WFMS-MECと略す。) からの初めての日本への宣教師として派遣される。ウィルミントン、シャナハン、そして (上記博物館の所在する) モリスのあるグランディ郡は、その意味で青山学院の原点の一つとも言えるであろう。



グランディ郡歴史協会博物館

しかしこの常設展示は意図的に計画された企画ではなかった。2023年8月から始まった小さな歩が新たな動きを生み出し、それがまた新たな動きを生み出すという形で、関わった者たちの思いを越えて波紋のように広がっていった結果である。同じことはしかし、ドーラの歩みそのものについても言えるであろう。その意味も重ね合わせて、「今、ドーラの蒔いた小さな種が150年後、モリスにおいても新しい芽を出し、更にダイナミックに花開こうとしている」のである¹。

「青山学院大学スクーンメーカー記念ジェンダー研究センター」は「スクーンメーカー」の名前を冠している。それは、本センターが、青山学院女子短期大学閉学に伴い、2021年4月に、女子短期大学総合文化研究所内設置のジェンダー研究所を移管継承する形で設置されたことに基づく²。そのような経緯に基づいて、センター規則第2条は「青山学院女子短期大学において行われていたジェンダー研究を受け継ぎ、青山学院における女子教育の伝統を新しい時代に継承するとともに、キリスト教精神に基づいて本学におけるジェンダー研究・教育を発展させ、青山学院及び社会に貢献する、という目的を掲げている。継承し発展させるべきものの原点となるキリスト教宣教師ドーラ・E・スクーンメーカーと向き合い、時代を超えた対話を行うことができる場が、ドーラが海外宣教を決意しそこから日本に旅立った、まさにその現地であるグランディ郡に生まれたことは、青山学院にとって、そして本センターにとって大きな意義があるであろう。

本年報においては、ドーラの蒔いた「宣教の種」の150年後の実りである、この博物館常設展示の報告のいわば第一部として、展示に至った約1年の経緯を記す。そして、常設展示の内容とその説明については、報告の第二部として別稿で述べる³。この1年はそれ自体、ドーラと向き合い、対話をするプロセスであった。その意味で本稿はドーラとの対話のプロセスの報告、証言ということになる。

Ⅱ ドーラとの対話の輪の広がり

1. 2023年前期

2023年8月より一年間、私は在外研究の機会をいただいた。そしてアメリカンフット

ボールでも有名な、カトリック大学University of Notre DameのLaw Schoolに受け入れていただくこととなった。この大学はインディアナ州サウスベンド（South Bend）という市に位置している。インディアナ州はイリノイ州の隣で、サウスベンドからシカゴには車で西に2時間ほどの距離である。

また、ドーラが幼少期から青春時代を過ごし、日本に旅立つ準備として教師をしていたウィルミントン、シャナハン、モリスといった市や村もイリノイ州にあり、やはりサウスベンドから車で南西に2時間半ほど、またシカゴからも南に2時間ほどの場所にあることが分かった。

そこで折角のチャンスなので、在外研究中に、二つのことをしておこう、と思い立った。一つには青山学院校友会シカゴ支部の皆さんにご挨拶すること、もう一つにはドーラが生活していた場所を訪問してみることである。そのため、出発前に、一方では関根茂校友会長に、シカゴ支部長の連絡先を教えていただいた。他方で、『しなやかに夢を生きる－青山学院の歴史を拓いた人 ドーラ・E・スクーンメーカーの生涯』⁴ 著者である棚村恵子師に、ドーラゆかりの地の住所を伺った。当初、全く別個の問合せのつもりであったが、結果的に、この二つのアプローチがドーラ展示へと見事に結びついていくことになる。

2. 2023年8月－渡米－

日本に台風が直撃し、フライトが心配されたが、何とか無事に予定通り2023年8月3日にシカゴに到着した。そしてシカゴからサウスベンドに移動する前に、伊藤泰彦校友会シカゴ支部長にお会いすることができた。その際、ドーラのこと、そして近いうちにモリス等を訪問しようと考えていることをお話ししたところ、伊藤支部長もまた、青山学院150周年ということで、4月のシカゴ支部総会において、創設者のドーラについてお調べになり話題提供なさったということであった。またモリスはご自宅から1時間位の所にあるので、調査の際には一緒に参りましょう、とおっしゃって下さった。この伊藤支部長との出会いがなければ、その後「宣教の種」プロジェクト（後述）が動くことは無かった。

3. 2023年9月－ドーラゆかりの地訪問－

棚村師からは、ドーラゆかりの場所について、ワード文書3頁にわたる丁寧な説明と情報を送っていただいた。その案内に基づき、9月13日、最初にモリス市の図書館を訪ねてみた。棚村師が大変お世話になったけれども「恐らく退職されているでしょう」と書かれていた司書のデビー・ステフェス（Deborah Steffes）氏が、もしまだ勤務していらっしゃるとすれば、まずお会いしたいと考えたからである。図書館に入ってカウンターにいた職員に尋ねてみたところ、やはり既に退職しているとのこと。しかしステフェス氏は今、近くのグランディ郡歴史協会博物館で学芸員をなさっている、そしてこの日は休館日だが、博物館に連絡をすれば会えるはず、と連絡先を教えてくれた。加えて、棚村著書（309頁）の写真を見せながら、ドーラが教鞭を執っていたセンター・スクール跡の医院の場所を尋

ねてみたところ、「この歯科医院はそこの角を曲がったすぐにあるよ」とのこと。モリスは人口1万4千人ほどの小規模な市で、「顔の見える」コミュニティなのである。

教えられた場所に行ってみると、その医院は確かに学校の面影のある建物（当時の学校の一部）であった。150年前にこの場所のこの建物でドーラが教鞭を執っていたのだ、と思うと、感動で体が震えた（「報告第二部」[注3参照]に写真掲載）。

棚村師は、「彼女の足跡は日本にもアメリカにもあまり多くは遺されていない。しかし、彼女が呼吸をした『夢の跡』に立つと、ドーラの命の残照のようなものが感じられてならなかった。まるで、『ラジウムから放たれる放射線のように』（フランクフル）、ドーラが今でも何かを語っているように思えたから不思議だ。…歴史は手だけではなく、足でも書くことを学んだ。」と振り返っているが（棚村著書308頁）、私も同じように「命の残照」のようなものを確かに感じた。私の場合、ドーラと同じ場所に立っていることに加えて、苦労してドーラの足跡を掘り起こしていった棚村師と同じ場所に立つことができた、という感動もそこに加わって、体が震えたのだと思う。

さて、棚村師から一つ頼まれたことがあった。それはドーラが帰米するとき蓮の種を持ち帰りデュペイジ川（DuPage River）に蒔いたものがイリノイ運河で大きく繁殖しているという記事（*Morris Daily Herald*, Aug. 5, 1922. 地域の歴史研究者が発見した記事内容を、2007年にステフェス氏が棚村師に送ってくれたもの。）の真偽、すなわちこの記事から約100年後の今も運河に蓮が咲いているかどうか確かめてみてくれないか、もし咲いていたらビッグニュースであろう、という依頼である（この記事は博物館常設展示ステージ5に展示されている）⁵。これは確かめる価値ありと思ったが、どこに行けばよいか見当がつかなかった。運河を目指してドライブし、水面にたどりつきそうな道路を走ってみた。そのどれも途中で行き止まりという繰り返しであったが、さらに運河沿いの公園（Channahon State Park）を探して行ってみると、そこに運河の遊歩道への入り口を見つけることができた（I & M Canal State Trail）。そのトレイルに入って少し歩くと小さなダム（Channahon Dam）があった。果たして、その水面には（睡）蓮の大群があったのである。1922年の記事には「エジプト（ママ）から戻ったドーラは持ち帰った種をデュペイジ川に蒔き、その種はシャナハンの水門（locks）を越えてイリノイ川と運河に広がり、今繁茂している」と書かれてある。目の前は確かにデュペイジ川であるが、今立っているダムが記事の水門であろうか。花の季節では無かったので葉と茎だけが残っており、また葉の形状からすると睡蓮かも知れない。またこれがドーラが蒔いた種に由来する蓮かどうかについてはさらなる調査が必要であるが、100年前の記事の信憑性はかなり高そうである。棚村師が推測するように、ドーラが種を持ち帰ったとするとその種は、日本における近代農学の祖であり、ドーラの学校創設を助けた津田仙が持たせた可能性が高いだろう。

青山学院の女子教育の基礎を創り上げたドーラは、5年で帰米し、次の宣教師にその発展を託す。ところが帰国しシャナハンに戻った後、苦労して建設した「海岸女学校」が焼

失してしまう。ドーラはすぐにその再建の為に、今度は米国で資金の寄附集めに奔走する。ドーラがいつ種を蒔いたかは不明であるが、もし焼失後であればなおさら、日本において蒔いた「宣教の種」が、苦境の中でも大きく花開くようにと、切なる祈りをこめて「蓮の種」をデュペイジ川に蒔いたに違いない。ダムに立ち（睡）蓮を目の前にして、百数十年前のドーラの切なる思いが伝わってきた。再び深い感動と共に、祈りを合わせた一時であった。そしてこのあと、「宣教の種」と「蓮の種」が重要なキーワードとなっていく⁶。

このようにドーラの日本への「宣教の種」が生まれた場所、そして同時に帰米後「蓮の種」を蒔いて日本での「宣教の種」が花開くことを切に祈ったであろう場所でもあるイリノイ州グランディ郡のウィルミントン、シャナハン、モリスを巡った後、ロサンゼルスに飛んで9月15日ボイル・ハイツを訪問した。ドーラが晩年に住んでいた通り、通っていた教会跡（現在この辺りはヒスパニック系の住民が多く、教会跡地もメキシカンの集会所になっている）を歩き、そこからほど近い、青山学院と校友及び関係者により建立されたドーラと夫ヘンリーのお墓（Odd Fellows Cemetery内）をお参りした。

ドーラは夫の療養のためシカゴから遠く離れたこの一画に移住し、試練の日々を経験しつつも、「宣教の種」の実りに支えられながら、教会で海外宣教の地道な奉仕を続け、天に召される直前に遺言とも言えるメッセージを執筆した（棚村著書、第5章）。実際にその場に立つと、決して華やかとは言えない晩年の日々の中で、良き日も悪い日もドーラが捧げ続けた祈りが伝わってくるようであった。

4. 2023年10月－博物館のステフェス氏に会うー

9月モリス等訪問後、博物館にメールを送ったところ、ステフェス氏から早々に返事をいただき、10月13日博物館にお伺いすることになった。ステフェス氏は棚村師のことをよく覚えており、当時の資料を分厚いファイルにまとめておられた。（後述のエダー博士の論文も保存しておられた。）またドーラの採用試験その他教育委員会の記録をはじめ、当時の貴重な原資料も拝見した。そして上記、「蓮の種」の1922年新聞記事に加え、モリスにも蓮の花が咲いているという記事も見せていただいた（*Morris Daily Herald*, July 9, 2007）。棚村師のリサーチのことを（調査訪問は一回だけだったにもかかわらず）ずっと心に留めて、何か情報があればストックして下さっているその姿勢から、ステフェス氏の誠実さと心配りと友情を強く感じた。



蓮の由来に関する記事

9月のモリス等訪問後、伊藤校友会シカゴ支部長とは、青山学院に関わる者たちがその「宣教の種」が生まれた場所に立つことができれば素晴らしい経験になるだろう、また「蓮の種」の調査は今後進めていく価値があるだろう、ということを話し合った。そしてこの10月のステフェス氏面談における相談事項として、前者に関しては（丁度10月1日にシカゴ支部による「リング狩り」の遠足があり、私もそれに楽しく参加させていただいたので⁷、そのイメージで）まずは子どもたちも楽しめるような遠足がモリスやシャナハンで可能かということ、後者に関しては、蓮の採取等を含めた調査を相談できる窓口になるモリス市の職員の紹介をしていただけないかということ、を尋ねることになった。

ステフェス氏は、この時もその誠実さと心配りを見せて、初対面の私に対して、前者に対しては詳細な提案（ドーラの時代の追体験として、船による運河ツアーができること。またモリスのセントラル・スクールや、シャナハンの蓮の花見学、そして子どもたちの自然体験などを含めた一泊のプログラム案を即座に考えて下さった。）、後者に関してはその場で市の職員の連絡先を教えて下さった。

5. 2023年11月ーモリス市役所訪問ー

そこからモリス市職員とのやり取りが始まり、市役所を訪問することとなったが、その際クリス・ブラウン（Chris Brown）市長と面談する運びとなった。このように関係が広がってくると、継続性を考えて、校友会シカゴ支部にも組織的に関わっていただく必要が出てくるだろう、ということで伊藤支部長と相談し、支部長、伊藤京子

事務局長、徳吉史子副支部長と共に11月30日に市庁舎に伺うこととなった。伊藤支部長には、青山学院の歴史、ドーラの歩み、蓮の種についての資料を作成いただき、市長室にて詳細に説明をしていただいた。このプレゼンテーションを通して、市長は今まで知ることのなかったドーラの歩みに大変感銘を受け、蓮に関する今後の調査や活動について全面的に協力して下さることになった。なおモリス市報に我々の訪問の記事が掲載されている⁸。

市庁舎訪問後、その足でシカゴ支部の皆さんと博物館を訪問した際、思い切って「この博物館の一角に、ドーラの常設展示コーナーを設けることを検討してくれないか。小さなスペースでよいので。」と依頼した。然るに、その場で前向きな返事をいただいた。大変嬉しいことであった。

この依頼をした背景には、前節4で述べた10月訪問後、伊藤支部長とは、校友会シカゴ支部に限らず青山学院関係者のモリス等訪問が実現できればよいが、そのためには博物館にドーラの資料展示があれば現実味を帯びてくるだろう、という話を始めていたことがある。そして上記のように市役所訪問の主たる目的は蓮の調査への協力を求めることで



モリス市報の記事（抜粋）

あったが、調査には更に時間がかかることが予想されたので、モリス市との継続的な関係を作るためにも、博物館展示は有意義と思われた。加えて、モリス市は先に述べたように顔の見えるコミュニティで、何世代も住み続けている人たちも多いが、しかし現地において（市長がそうであったように）ドーラのことは殆ど知られていないことがわかったためでもある。このようにして、ここからドーラの展示の動きが始まることになる。

6. 2024年1月－学院への提案書提出－

さて、常設展示ということになると、筆者個人また校友会シカゴ支部の範囲を超えたレベルとなり、青山学院の了解が必要になってくる。また展示のための資料についても学院からの提供協力が必要であろう。そこで、学院（山本与志春院長）へ伊藤支部長と連名で「提案書」を提出することとした。丁度2024年度が学院創立150周年となる。従ってドーラ展示はベストのタイミングと思われたので、タイトルは「米国イリノイ州に於ける青山学院創立150周年記念に向けての活動のご提案」（2024年1月4日付）とした。この文書作成についても、伊藤支部長が相当部分を担って下さった。

7. スクーンメーカー「宣教の種」プロジェクト

提案書には、今後に向けて実現をめざしたいと考えるに至った三つの項目を並べた。

- ①イリノイ州モリス市にあるグランディ郡歴史協会の博物館の一角にスクーンメーカー宣教師の足跡に関しての資料展示スペースを設ける。
- ②スクーンメーカー宣教師が米国帰国後グランディ郡運河に蒔いた可能性のある蓮の種の調査。
- ③スクーンメーカー宣教の種ツアー（青山学院関係者による）。

こののち、これらを「スクーンメーカー『宣教の種』プロジェクト」と銘打って、校友会シカゴ支部と共に取り組みを進めていくことにした。現在の進捗状況としては、①は実現、②は検討段階、③はツアープランはほぼ出来上がっている状態、そして加えて④としてスクーンメーカー・ファミリー研究も新たにテーマに上がってきている。

8. 2024年1月から2月にかけて－資料センター、学院史研究所の協力－

提案書のうち、この段階で学院の了解と協力を得る必要があるのは①である。山本院長は年初にもかかわらず、提案書を受け取ってすぐ、迅速に各関係部署に当たって下さり、展示の了解と共に、青山学院資料センターの協力を取り付けて下さった。そこで1月28日に資料センター及び青山学院大学学院史研究所の教職員とのオンライン打合せを持つ運びとなった。

博物館の展示に当たり、以下の二点については不可欠と思われた。

- a) 資料センター所蔵のドーラ関連資料のピックアップと提供

b)「ドーラ・E・スクーンメーカー年譜」(棚村著書、329頁以下)の英訳

資料センターと学院史研究所は、早々にa)の一覧を作成してくださった。またb)については翻訳を個人的に依頼していると大変な時間がかかるところ、業者発注をかけてくださった。そのおかげで棚村師に翻訳チェックをしていただく時間的余裕が生まれ、こちらについても3月には英訳年譜完成版を博物館に提供することができた。なお現在、博物館における展示においては、各ステージにおいてQRコードを読み込むことで、当該時代の年表を見ることができるようになっている。

9. 2024年3月から4月ー博物館による常設展示準備とツアー試行ー

3月8日、展示の枠組みができたということで、博物館に確認に行った。その際に驚いたのは展示スペースの広さ、そしてストーリー性である。11月には、ごく小さな一角でもよいからと展示依頼したのであるが、実際には4×6メートルほどもある広いスペースが確保されていた。そして展示は棚村著書の章を基にした6つのステージにより、ドーラの生涯を辿っていくという構成である。質量ともに充実した中身となっており、集中的に広く深い調査を行ったことがわかる。博物館の意気込みを感じた。



完成した常設展示スペース

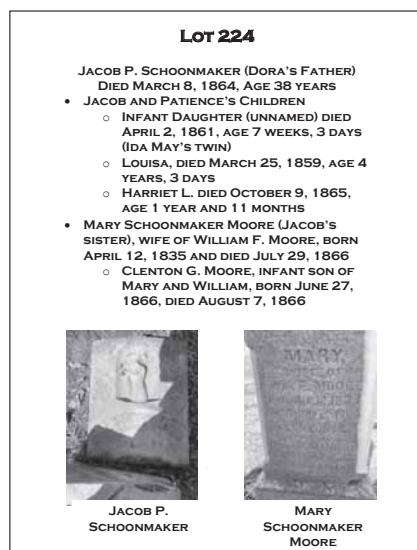
展示内容としては、棚村著書における写真や図表(そのオリジナルは博物館ないしモリス市図書館所蔵のものがかなりある)、そして資料センター所蔵資料(特に日本における写真や図表、卒業生の写真など)も有効に活用されているが、博物館が新たに探し出した、地元ならではの地図や新聞、資料等も相当数が展示されている。そしてこれらの展示資料に対して、棚村著書を読み込んだ上での博物館による詳細な説明が、数多く加えられている。

こののち、6月29日のオープニング・セレモニーまでに、資料もその配置もさらに整えられていくが、6つのステージにより「ドーラの生涯」を見通す、というコンセプトは揺るぐことはない。それ故、手を加え修正をしていくごとにますます圧巻の内容となっていく。これは棚村師(メールによる頻繁な問い合わせにいつも丁寧に答えてくださった)、青山学院、そして何よりこの展示に至るまで何度も博物館に通い、アドバイスを重ね一緒に展示を整えていった伊藤泰彦校友会シカゴ支部長と伊藤京子事務局長による、博物館との共同作業の成果である。展示の詳細は、冒頭に述べたように、改めて別稿・報告第二部(注3参照)で紹介する。

3月28日に博物館を再訪した。展示はさらに充実を見せていたが、この日は歴史協会による「ゆかりの地ツアー」の試行が行われた。青山学院関係者が来訪して博物館展示を観

たあと、150年前のドーラの生活の跡を辿ることができれば、さらにドーラへの理解と共感が深まるであろうと考え、検討を依頼していたことに対し、展示作業と平行して準備をして下さったのである。半日をかけたツアー完成版は、オープニング・セレモニー後に実施されることとなる。訪問場所は注(3)に示した別稿で述べるが、既にこの段階で、スクーンメーカー・ファミリーの多くのお墓があるウィルミントンのオークウッド墓地 (Oak Wood Cemetery) のガイドブックレット (日本語バージョンも作成) が出来上がっていたことにも驚いた。

4月から5月にかけて、青山学院への報告のため、伊藤支部長が展示動画を作成くださった。5月の動画には、宗教センターの了解を得て、学院大学聖歌隊の演奏をBGMとして使わせていただいた。



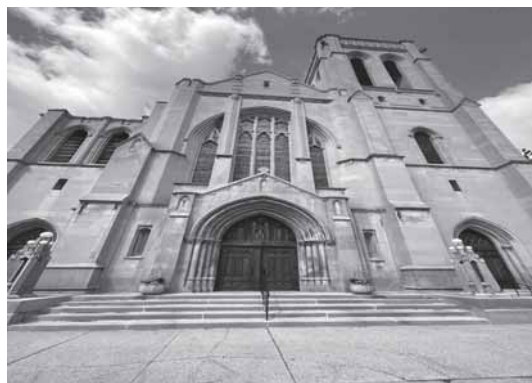
Oakwood Cemetery Booklet (抜粋)

10. 2024年4月ーエバンストン第一合同メソジスト教会訪問ー

ドーラはメソジスト監督教会婦人海外伝道局 (WFMS-MEC) から日本へ派遣されるのであるが、その派遣式が行われたエバンストン第一合同メソジスト教会 (First United Methodist Church of Evanston) に4月12日、校友会シカゴ支部長、事務局長そして副支部長 (奥村晃代氏) と共に訪問することが叶った。派遣式 (Missionary Meeting) は1874年9月20日に行われた。現在の教会堂は建て直されたものだが (それでも1910年建立の、歴史ある重厚な礼拝堂である)、ドーラが派遣された同じ場所に立つことができ、ここでもまた感動を覚えた。

この教会には専属のアーキビストがおり (Dr. Cate Whitcomb)、ドーラについて調べてくれたが、残念ながら教会内には1890年頃より前の資料はないということであった。

このエバンストン教会は、WFMS-MEC ノースウェスタン支部メンバーに加えて、日本の「矯風会」につながるクリスチャン女性禁酒同盟 (Woman's Christian Temperance Union. 以下WCTUと略す。) を発展させたフランセス・ウィラード (Frances Willard) などもまた深く関わっており、女性のエンパワーメントの歴史を担ってきた場である。6月29日オープニング・セレモニーのあと棚村師と共に、そし



エバンストン第一合同メソジスト教会外観

て7月末に来訪して下さった伊藤悟青山学院宗教部長とも、この教会の礼拝に出席したが、主任牧師、副牧師とも女性であり、メッセージもまた性的少数者のエンパワーメントに関わる内容を含んでいたことが印象に残っている。

11. 2024年5月ーフランス・ウィラード博物館訪問ー

エバンストン第一合同メソジスト教会のすぐ近くにフランス・ウィラードの博物館（Frances Willard House Museum）がある。そこには津田仙がWCTUに寄贈した鐘（Temple Bell）が置かれている。津田は矯風会の活動にも協力してきたのであるが、この鐘はその禁酒禁煙運動の成果としてキセルを溶かして制作したものである。1893年シカゴ万国博覧会の審査員として来訪したとき、この鐘を携え持ってきて



津田仙寄贈の鐘

展示し、そののちWCTUに寄付した。なお津田はこの時、ドーラとの再開を果たしている。因みに、女子小学校におけるドーラの最初の生徒であり最初に受洗に至った一人である小崎（岩村）千代は、初代会頭矢嶋楫子のあと矯風会会頭になっている⁹。この博物館に、5月22日にはシカゴ支部長、事務局長、博物館のフーチン歴史協会長と共に、7月29日には支部長、事務局長、伊藤悟宗教部長と共に訪問した。ウィラード博物館側からは、学芸員1名と、ウィラードの遠縁にあたる子孫の方1名が対応し、館内ツアーを組み、詳細な説明をしてくださった。

12. ノースセントラル大学とスーザン・バーンファインド宣教師

シカゴから西に30マイルほどのネイパービル（Naperville）にある、青山学院大学の協定校であるNorth Central College（NCC）から、他の米国女性宣教師との比較においてドーラについて理解を深める、という観点が与えられたことを、ここで述べておきたい。NCCは学生に寄り添ったりベラルアーツカレッジとして少人数教育を展開している協定校であるということに関心を持ち、2023年11月に既に一度見学させていただいたのであるが、その時に、チャペルの前のパネルの中に、“Tokyo Bible School Instructors, Including Three Alumnae, ca. 1905”という写真があり、そこに写っているのは女性宣教師として日本に渡った卒業生である、という説明を聞いたことがずっと気になっていた。

2024年4月エバンストンの教会訪問は、11月に上記の説明をしてくれたエリック・ドリトル師（Rev. Eric Doolittle）の協力により実現したのであるが、4月のやり取りの際、当該写真の卒業生についてももう少し詳しく知りたい、とお願いした。ドリトル師はNCCの資料センター長クリス・マルドレイ・ジェロシック氏（Kris Maldre Jarosik, Head of

Archives and Special Collections) を紹介してくださった。ジェロシック氏はまずNCCの歴史について教えてくださった。NCCは福音教会(Evangelical Church)によって設立されたが、福音教会は戦後キリスト同胞教会(United Brethren in Christ)と統合、さらに合同メソジスト教会と統合して現在に至っている、ということである。

そして写真の女性宣教師は、スーザン・バーンファインド(Susan Bauernfeind)であることを教えてくださり、その歩みを記した論文をいただいた¹⁰。その概略を記しておこう。スーザンはNCC(当時はNorth-Western College)での4年間の教育を終えて卒業した翌年1900年に、もう一人の宣教師(Anna M. Kammerer)と共に、福音教会から派遣されて日本にやってくる。同教団の婦人宣教局(Woman's Missionary Society, 以下WMSと略す。)の推薦とサポートによるのであるが、WMSは、この段階ではWFMS-MECのような女性組織としての自立性を獲得しておらず、派遣には教団としての決定が必要であった。スーザンは来日後、試行錯誤ののち女工伝道を始めてそれが軌道に乗るが、バイブルウーマン養成の必要性を強く感じ、1904年にBible Women's Training Schoolを立ち上げる。この学校は大きな成功を収め、ニーズに応えるため、1921年にTokyo Bible Schoolと改名して、男子学生にも開いて、英語教育も強化していく。スーザンは一生日本に留まるつもりだったが、二次大戦の本格化に伴い、1941年4月に止むなく米国帰国する。二次大戦後、勝利に沸く米国の中で、スーザンは日本の破壊状態に心を痛め、戦後間もなくの1945年10月27日母校の神学校学生への講義において、東京だけでも250の教会が破壊されたことに言及し、彼女が知る限りの犠牲者の名前を一人一人読み上げ、和解の呼びかけをもって講話を閉じる。そしてスーザンはその夜に天に召されたのである。すなわちこのメッセージは彼女の日本の人々に対する最後の奉仕であった¹¹。スーザンとアンナが建て、長く拠点としてきた教会は、現在の日本基督教団小石川白山教会である。その会堂名はSusan Bauernfeind記念会堂であり、同教会はスーザンの歩みを今もしっかりと覚え続けている¹²。

スーザンの働きは、時代も、宣教の展開も、滞在期間も、教団も、ドーラとは異なって



スーザンの写真(論文表紙より)



スーザン・バーンファインド記念会堂
(小石川白山教会WEB Pageより)

おり、対照的である。しかし同時に19世紀に（しかも同じイリノイ州で育まれた）共通する女性の生き方に貫かれている。その意味で、スーザンの歩みと照らし合わせることで、ドーラの生き方の特徴もまた、米国の女性史、キリスト教史の観点から、より鮮明に浮かび上がってくる。NCCでのスーザンとの出会いもまた、ドーラの歩み、「宣教の種」の理解につながっていく貴重な示唆となった¹³。

上記7の「宣教の種」プロジェクトの③「宣教の種」ツアーが実現した暁には、10のエバンストン第一合同メソジスト教会、11のフランセス・ウィラード博物館、そしてこの12の協定校NCCは訪問に加えたい場所である。

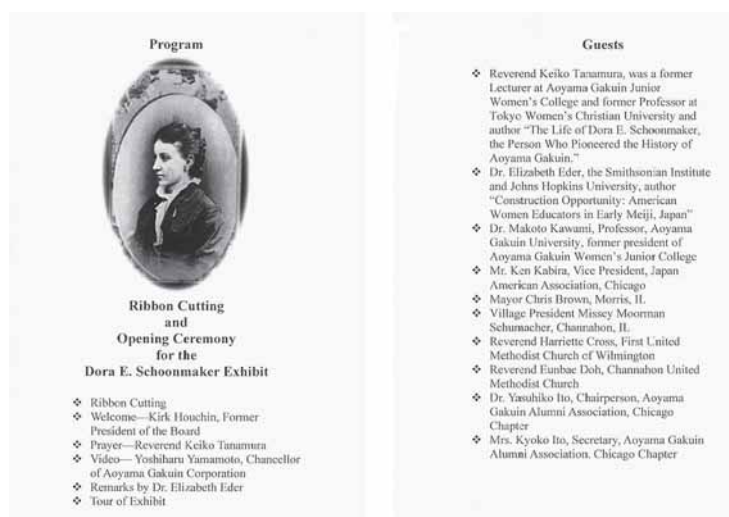
13. 2024年5月から6月ー常設展示への青山学院の協力ー

博物館の常設展示オープニングに向けて、青山学院も積極的な協力を惜しまなかった。山本院長はセレモニーのための祝辞（ビデオメッセージ）の依頼を快諾くださった。実際にはキャンパスにおける屋外の撮影は大変で、チャイムや飛行機や生徒たちの声を避けるために、時間帯を選びつつ何度も撮り直しをしなければならなかったとのことである。学校ならではのエピソードであるが、それでも学院本部のあるベリーホール前のドーラのレリーフでの撮影にこだわってくださったことに感謝したい。

また、6月には常設展示への校友会シカゴ支部の協力が、青山学院の150周年記念事業として認められた。そのお陰で、150周年のロゴを式次第そして展示の中にも掲載し、常設展示が博物館と青山学院の共同作業であることを明示することができた。

14. 2024年6月29日ドーラ常設展示オープニング・セレモニー

このようにして、念願のドーラ・E・スクーンメーカー常設展示オープニング・セレモ



式次第



テープカット



オープニングセレモニーの様子

ニーが、6月29日に開催された。約65名の参加者があったが、その顔ぶれは多様である。代表してテープカッターになった人たちを見れば、このスクリーンメーカーの展示がどのような人たちの結びつきによって実現しどのような人たちとの繋がりを生み出したかがよく分かる。

来賓：

棚村恵子牧師・元青山学院女子短期大学講師、元東京女子大学教授。『しなやかに夢を生きる』の著者

エリザベス・イダー (Elizabeth Eder) 博士・スミソニアン協会学芸員、ジョンス・ホプキンス大学講師。『機会を構築する－明治初期のアメリカ女性教育者』¹⁴の著者

河見誠青山学院大学教授、元青山学院女子短期大学学長

川平謙慈シカゴ日米協会副会長 (Vice President, Japan America Society of Chicago)

クリス・ブラウン (Chris Brown) モリス市長

ミシー・ムーアマン (Missey Moorman) シャナハン村長

ハリエット・クロス (Harriette Cross) ウィルミントン第一合同メソジスト教会牧師

ユンビ・ソー (Eunbae Soh) シャナハン合同メソジスト教会牧師

伊藤泰彦博士・青山学院校友会シカゴ支部長

伊藤京子青山学院校友会シカゴ支部事務局長

博物館のスタッフ：

カーク・フーチン (Kirk Houchin) 歴史協会会長 (当時。現在、財務責任者)

デビー・ステフェス (Debbie Steffes) 学芸員

メアリ・コリンズ (Mary Collins) 歴史協会運営事務局長

この日のために、地域のボランティアが手作りオーナメントを制作し配布してくれた。ドーラの時代と変わらず、この地には生きたコミュニティが存続していることの証



オープニング記念に製作されたオーナメント (表・裏)

である。式次第は提示した通りである。伊藤支部長がスライドを用意して展示の説明をしてくださった。またエダー博士は、明治期日本の女子教育における女性宣教師の働きの意義についてお話しくださった。山本院長の祝辞 (ビデオメッセージ) は、ドーラを通して150年後にモリスと日本がつながったことを実感する時間となった。ドーラの思いと祈りを継承し続けている学院の姿勢が、レリーフを背景にした美しい映像と共に、参加者の心に染みわたっていった。

そして素晴らしかったのは、ドーラ伝著者の棚村恵子師が駆けつけてくださったことである。これは博物館にとって代えがたいプレゼントとなり、大いなる励ましになった。

以下、山本院長の祝辞（ビデオメッセージ）、そして晴れやかなテープカットに続いて語られた棚村師の挨拶と祈りをここで紹介しよう。

私は青山学院院長山本与志春です。

この度、グランディ郡歴史協会博物館にドーラ・E・スクーンメーカー常設展示コーナーが開設されましたこと、青山学院を代表して感謝とお慶びを申し上げます。

今から150年前、1874年11月16日、23歳のドーラ・スクーンメーカー宣教師は女子小学校を開設しました。女子小学校といえどもたった7人の生徒。校舎も教科書もノートありません。あったのは、女子の学校を作りたいという強い意志。キリスト教を伝えたいとの信仰でした。150年経った今、青山学院は幼稚園、小学校、中学、高校、大学、大学院で23,000人が学ぶ総合学園になりました。高校生が一番入学したい大学のランキングの1位になっています。ドーラ・スクーンメーカーが灯した小さな光が大きな光となって輝いています。一粒の種が鳥を宿すほどの大きな木に成長しました。それは、5つのパンと2匹の魚で、5,000人が満腹した奇跡を彷彿させる、神様の祝福の象徴です。ドーラ・スクーンメーカー宣教師の育った街に、彼女の業績が展示されることは、青山学院にとって大きな喜びであり感謝です。これに携わってくださった皆様に心から感謝を申しあげます。これを機会に、青山学院とグランディ郡の交流が進められますよう願います。本日はおめでとうございます。



山本院長ビデオメッセージ

皆さん、こんにちは、日本の東京から参りました棚村恵子です。ドーラ・E・スクーンメーカーの展示の開会を祝うために、皆さんと一緒できることを大変嬉しく、また光栄に思います。

ドーラを記念するこの素晴らしいプロジェクトに熱心に参加された皆様、そして創立150周年を迎えられた青山学院に心よりお祝い申し上げます。

ドーラ・スクーンメーカーは素晴らしい方でした。東京での5年間という短期間の宣教師活動にもかかわらず、彼女は生涯を通じてその使命感を燃やし続けました。ドーラは日本における女子教育の礎を築く種を植え、明治の時代に政府からの妨害や社会の冷たい風潮を乗り越えました。帰国後も、彼女は太平洋のこちら側から設立し

た学校を絶えず支援し続けました。

彼女の人生そのものがメッセージです。夢をしなやかに生きること。勇気を持って海を渡ること。人々をつなぐ架け橋になること。道を切り開くこと。異なる国籍と文化の土地に平和と善意の種を植えること。どんなことや誰によっても損なわれない持続的な友情を築くこと。「光の子」として他者に仕え、愛すること。これが彼女から私たちへのメッセージです。確かに、彼女の人生こそは過去において、そして今もお私たちへのメッセージです。

最後に、この記念すべきイベントに私を招待してくださったグランディ郡歴史協会と青山学院校友会シカゴ支部に心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

ご一緒に祈りましょう。

親愛なる恵み深い神様、

あなたの御名を賛美します。この素晴らしい祝福の時を共に過ごせることに感謝します。あなたの思いと道は私たちの思いと道をはるかに超え、あなたのご計画は常に私たちの前を進むことを賛美します。あなたは力ある者ではなく、ドーラ・スクーンメーカーのようなあなたの小さな忠実なしもべを通して目的を達成されます。

150年前、彼女の美しい故郷ウィルミントン、シャナハン、そしてモリスから東京の街へあなたの愛の大使としてドーラを送り出してくださったことに感謝します。あなたは小さなドングリを大きな樫の木、すなわち青山学院に成長させてくださいました。どうか彼女の貴重な人生に関する今回の展示が、アメリカと日本の永続的な国際友情の象徴となりますように。

この心からの感謝をイエスの御名においてお捧げします、アーメン。



棚村先生の挨拶・祈祷

15. 2024年7月ー伊藤悟学院宗教部長来訪ー

7月26日から31日、伊藤悟学院宗教部長がイリノイに来訪された。博物館表敬訪問ののち、博物館スタッフがドーラのゆかりの地ツアーを組んでくださった。伊藤宗教部長にはその他、上記10のエバンストン第一合同メソジスト教会、11のフランセス・ウィラード博物館、12の協定校N C Cも巡っていただいた。そしてシカゴ支部の校友との交流会も持つことができた。

博物館のあるモリス、シャナハン、ウィルミントンは、青山学院がその創立のルーツとスピリットを覚え続けるために、今後も関わっていく場となるであろう。学院宗教部長の来訪は、その未来の関わりに向けた一歩となった。

16. 2024年11月17日ーウィルミントンでの「青山学院創立150周年記念」特別祈祷ー

スクーンメーカー一家は1856年（ドーラ5歳）にニューヨークからウィルミントンに移住し、1864年（ドーラ13歳）まで住んでいた。そしてドーラが海外宣教への夢を抱くことになったのは8歳の時である。その意味で、一家が通っていたウィルミントン第一合同メソジスト教会（First United Methodist Church of Wilmington）は、ドーラの信仰と日本宣教の原点と言えよう。

11月17日、そのウィルミントンの教会において、ドーラの働きとその実りである青山学院150周年を覚え感謝する礼拝が持たれた。ハリエット・クロス牧師（Rev. Harriette Cross）によりドーラの信仰とビジョンに貫かれた歩みについてのメッセージがなされ、青山学院創立150周年を祝する特別祈祷がもたれた（“Prayer Service honoring the 150th Anniversary of the founding of Aoyama Gakuin University in Tokyo Japan, through the missionary efforts of Dora Schoonmaker”）。この礼拝には、グランディ郡歴史協会博物館、ウィルミントン歴史協会、校友会シカゴ支部のメンバーも出席し、日米で心をつなげて祈りが捧げられた。

11月15日、青山学院大学における創立記念礼拝で、筆者はドーラの生き方について奨励をさせていただいた（題：「託し、祈り、支える生き方」）¹⁵。そこでは、ウィルミントンの教会でのその二日後の礼拝における皆様とも心を合わせられることに対する感謝の祈りを捧げた。11月16日創立記念日には、青山学院講堂において、青山学院150周年記念式典が記念礼拝をもって挙行された。そしてその翌日の11月17日ウィルミントンの教会の礼拝へと、祈りのリレーが実現したことになる。150年前にドーラが蒔いた種は、150年後の今、日本とアメリカの両方が繋がってさらに新しい花を咲かせようとしている。



司式のHarriette Cross牧師

17. 広報

ここに記した博物館常設展示実現のプロセスは、その後の動きも含めて、自分たちの思いを遙かに超えた出会いの連鎖が生み出した、一種のムーブメントのように感じられるものであった。遠く離れた場所でのイメージしづらい働きに対して、学院広報もこのムーブメントの輪に連なり、青山学院内外に発信下さった¹⁶。

また、青山学院校友会サイト「シカゴ支部活動」では、さらに関連する様々な資料や写真等がアップされている¹⁷。モリスの地元紙においても、セレモニー及び伊藤学院宗教部長訪問の記事が掲載されている¹⁸。

Ⅲ さらなる対話の出発点として

常設展示は、上記のように、ドーラとの対話の輪が様々な人を巻き込みながら波紋のように広がっていった到達点である。それは出会いの連鎖によって作り上げられていったが、出会いとその連鎖を生み出したのは、場・空間の力である。現地に立つことがいかに重要であるか、改めて教えられた1年であった。その意味で現地にドーラの常設展示の場が生まれたことの意義の大きさは測り知れない。

そして何よりも、150年前に「宣教の種」を蒔いたドーラの思い、折りこそが、時間を越えて、関わる者たちを動かす原動力となったことが、この経緯報告の中で確認されるであろう。ここでドーラとの対話の中核的な柱となったものは、Ⅱ3で述べた、ドーラが日本から米国に持ち帰ったと思われる「蓮の種」であった。

実現した常設展示は、ドーラとのさらなる新たな対話へと私たちを誘う出発点と言えよう。その展示内容はドーラの生涯全体を見渡す、質量共に充実したものであるので、冒頭に述べたように、注3に記載した報告第二部で詳述する。そこから、ドーラが150年後の私たち（日本に住む人、グランディ郡に住む人、いずれをも含めて）を動かす力をなぜ持っているのか、共鳴を生み出す「しなやか」な生き方（棚村著書のタイトル）とはどのようなものか、といったより深い問いかけへと導かれていくことになるだろう。

ここまでの宣教の種プロジェクトは、伊藤泰彦支部長をはじめとした校友会シカゴ支部の皆様の尽力なしには実現できなかった。伊藤支部長は今も続けてグランディ郡歴史協会博物館そしてウィルミントンの教会とも連絡を取り交流を続けてくださっている。本稿の内容チェックも、時間を惜しまず行ってくくださった。本稿を閉じるにあたって、深い感謝の辞を述べたい。

【注】

- 1 拙稿「グランディ郡歴史協会博物館 スクーンメーカー常設展示～『宣教の種』が生まれた場所で～」青山学院資料センターだより第30号（2024年7月）3頁。
- 2 拙稿「ジェンダー研究所開設」青山学報272号（2020年7月）76頁。「最終号を迎えるにあたって－総合文化研究所の成果、そして未来へ－」青山学院女子短期大学総合文化研究所年報第29号（2021年12月）1-2頁。
- 3 「スクーンメーカーの「しなやかに夢を生きる」生涯－グランディ郡歴史協会博物館による常設展示開始」『キリスト教と文化：紀要・青山学院150周年記念特別号（第40号別冊、2025年3月）』以下、「報告第二部」とする。
- 4 棚村恵子『しなやかに夢を生きる－青山学院の歴史を拓いた人 ドーラ・E・スクーンメーカーの生涯』（青山学院、2004年11月16日）。以下、「棚村著書」と略す。本書は青山学院創立130周年を記念して『力を与えませ 本多庸一夫人貞子の生涯』と共に青山学院が発行し、記念式典において贈呈されたものである。そして2020年青山学院女子短期大学設立70周年に当た

り復刻版を発行した。

- 5 この記事に関する説明と抄訳については、展示を紹介した前掲注3・報告第二部二5参照。
- 6 但し、6月29日オープニングセレモニー後のツアーでは、蓮が満開の別の水場のある自然公園（Four Rivers at the Confluence）に立ち寄ったのであるが、その環境教育センターのガイドによると、そこに群生する蓮はアメリカ由来のものであろう、ということであった。ドーラが種をどこで蒔いたか。どこにどのように流れていったか。交雑した可能性があるか。また、常設展示ステージ5の中には、その後1970年代には蓮は絶滅したという別の記事も示されている（“History of Channahon: From Past to Present,” Channahon - Aux Sable Heritage Society, 1972）。そもそもドーラが種を日本から持ち帰ったか、だとすれば津田仙が渡したものか、ということを含め、真相を見出すためにはさらなる調査が必要である。
- 7 10月1日Kuiper Apple Orchardへの校友会シカゴ支部遠足で、女子短期大学教養学科・専攻科1999年卒奥村晃代さんと驚きの嬉しい再会となった。奥村さんが米国大学留学の際、筆者は推薦状を書いたのであるが、会うのは約15年ぶりとなった。現在シカゴに在住して元気に頑張っており、シカゴ支部にも積極的にに関わり、副支部長の一人となっている。
- 8 *Morris City Newsletter*, Spring 2024, p.11.
- 9 小崎千代はまた、青山女学院校友会発足時から1939年77歳で亡くなるまで校友会長を務め、青山女学院を支え続けた（拙稿「大学の教育目的につながる生涯教育のあり方ー青山学院女子短期大学同窓会の取組ー」青山学院女子短期大学総合文化研究所年報第29号、2021年12月、6-7頁）なお、1921年ドーラ70歳のクリスマスに、二人はロサンゼルスで43年ぶりに喜びの再会を果たしている（棚村著書283頁）。
- 10 Kevin Nalefski, “A Woman on a Mission: The Story of Susan Bauernfeind and Protestant Women in Missionary Work,” North Central Undegraduate Archives Publication, Nr. 11, 2017.
- 11 「私は長い年月日本で過ごし、多くの魂をキリストのもとに呼び戻すことができたという特別な恵みを神に感謝します。戦火によって栄光の座の元に逝った兄弟姉妹達はキリストと共にいます。彼等は人に仕え愛に生きた人達でした、そして彼等の魂は勝利して主と共に生きています。遺された人達は（落胆せず）勇気をもって与えられた命を生きようとしています。神は日本におけるキリストの教会に、これらの信仰ある者たちを通して、力を与えてくださるでしょう。彼等は我々の祈りを必要としています。」（*op. cit.*, p. 23.）
- 12 在外研究から帰国後9月26日に、日本基督教団小石川白山教会を訪問させていただいた。その時に『愛の泉の百年ーバーンファインド宣教師の伝記』（2002年。Lowell Meserschmidt, *Bauern-Sensei: The Story of Susan Bauernfeind Pioneer Missionary to Japan*, Lima, OH, 1991の翻訳）『小石川白山教会百年史』（2008年）の二冊をいただいた。『百年史』には、スーザン達がバイブル・ウーマン育成を決意し取り組んだ契機は、「メソジスト派宣教師ミス・マチルダ・スペンサーと語り合う機会」であったと記されていた（32頁）。Miss Matilda A. Spencerは1878年10月、ホルブルックと共にWFMS-MECから海岸女学校に派遣され、その一年後にドーラが「宣教の種」のバトンを託した宣教師の一人である（青山さゆり会『青山女学院史』1973年、83頁）。

間接的ながら、このような形でドーラとスーザンのつながりがあったことに驚きと感動を禁じ得なかった。いただいた二冊とも非売品であり、小石川白山教会に伺わなければ手にし読むことができなかった貴重な書である。突然の連絡にもかかわらず、時間を作ってくださり、またこのような他に代えがたい「お土産」を用意くださった早川真牧師、坂元高牧師に感謝申し上げたい。因みに坂元牧師は青山学院高等部・大学日本文学科の卒業生であり、この点でも嬉しいつながりをいただいた。ドーラの蒔いた「宣教の種」は、新たなつながりと対話を生み続けることを実感した出会いであった。

- 13 もう一つ付言すれば、NCC及び福音神学校の卒業生で、「学校の使命と伝統である価値－高潔なリーダーシップ、正義と奉仕に生きる歩み－を体現して生き抜いた者たちを覚え讃える」ための「証人たちの壁」(Wall of witness)というパネルが、礼拝堂の横の壁に掲げてある。そこに1950年卒太田俊雄牧師・敬和学園高校初代校長の銘が並んでいる。太田師は、7月末にNCCと一緒に訪問した伊藤悟学院宗教部長の恩師である。

- 14 Elizabeth Eder, "Construction Opportunity: American Women Educators in Early Meiji, Japan," 2001. ドーラに関する数少ない先行研究となる博士論文(棚村著書307頁参照)。

- 15 青山学院大学礼拝サイトに動画がアップされている。

https://www.aoyamagakuin.jp/post_consistency/onlinereihai/

- 16 発信された記事を列挙しておく。

- ・前掲注(1)・青山学院資料センターだより第30号(2024年7月31日)。
- ・「アメリカ・グランディ郡歴史教会博物館におけるスクーンメーカー常設展示とオープニングイベントを開催(<メッセージ>河見誠「ドーラの蒔いた種」、伊藤泰彦「受け継がれる青学マインド」含む)青山学院ウェブサイトニュース(2024年7月9日)。
- ・「アメリカ・グランディ郡歴史教会博物館におけるスクーンメーカー常設展示とオープニングイベントを開催」(伊藤泰彦「『青が、来る』ドーラ・E・スクーンメーカーの人生を辿る常設展示」含む)青山学報289号(2024年10月15日)18-19頁。
- ・河見誠、伊藤泰彦「米国ウィルミントンの教会(ドーラ・スクーンメーカー宣教師の出身教会)の礼拝で特別祈祷がささげられました」青山学院ウェブサイトニュース(2024年11月21日)。

- 17 <https://www.alumni-aoyamagakuin.jp/chicago/>

- 18 Grundy County Historical Society debuts Aoyama Gakuin founder Dora Schoonmaker exhibit, *Morris Herald News*, July, 1, 2024. Aoyama Gakuin University Chaplain visits Schoonmaker exhibit at Grundy County Museum, *Morris Herald News*, August 16, 2024.

The Fruits of the “Seeds of Mission” Planted by Schoonmaker 150 Years Later

– The Story of How the Dora E. Schoonmaker Permanent Exhibit in
the Museum of the Grundy County Historical Society Came into Being –

Makoto Kawami

Dora E. Schoonmaker founded the Girls' Elementary School in Azabu on November 16th, 1874. It was the beginning of Aoyama Gakuin, which celebrated its 150th anniversary in 2024. In that very year, 2024, the Dora E. Schoonmaker Exhibit was launched at the Museum of the Grundy County Historical Society in Illinois, USA.

The “seeds of mission” that Dora planted in Japan were returned to the United States 150 years later, to be sown in Grundy County, where Dora grew up, decided to become a missionary and departed for Japan. And now they have begun to bloom newly in the form of her permanent exhibit in the Museum. This was not an intended project, but a movement that spread like ripples further and further beyond the thoughts of those involved, and was itself the process of dialogue with Dora. This article reports on this one-year story, in the hope that it will become the starting point of further movements to the future beyond borders.

Keywords: Dora E. Schoonmaker, Permanent Exhibit, Museum of the Grundy County Historical Society, Aoyama Gakuin's 150th anniversary, the Seeds of Mission

執筆者（掲載順）

菅野 美佐子 青山学院大学地球社会共生学部地球社会共生学科 助教

河見 誠 青山学院大学コミュニティ人間科学部コミュニティ人間科学科 教授

青山学院大学
ジェンダー研究センター年報 第4号

2025年3月15日 発行

編集発行：青山学院大学
スクーンメーカー記念 ジェンダー研究センター
センター長 申 恵丰
〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25

印刷：株式会社双文社



Aoyama Gakuin University
Schoonmaker Memorial Center for Gender Studies



地の塩、世の光

The Salt of the Earth, The Light of the World

青山学院スクール・モットー